
SF奇兵隊 2 伝法赤い筏

永良隆樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S F 奇兵隊 2 伝法赤い筏

【Nコード】

N 1 8 9 0 A

【作者名】

永良隆樹

【あらすじ】

あれから十年。長州は完全にパラレルワールドと化していた。ゆがんだ歴史の歯車を捻じ曲げることのできる者はいるのか。S F 奇兵隊続編。

戦いを受け継ぐ者達（前書き）

思いのほか早く書きあげました。また投稿できてうれしく思っています。まことに勝手ながら、前作SF奇兵隊のサブタイトルを『伝法（ならず者）斑の狗』とし、今作サブタイトルを『伝法（ならず者）赤い筏』と、したいと思います。と言っても、勝手に言うんですが（笑）。

戦いを受け継ぐ者達

S F 奇兵隊

其の二 伝法（ならず者）赤い筏

千鶴は、奇兵刀と銃を前に放心していた。既に小一郎はいない。あの時、混乱のなかで生き別れた。けれど、小一郎の奇兵刀と銃を一丁つつ、香枝は大事に持っていた。遺されたそれらの物をこっそり持ち出して見つめ、ただ座っていた。幅広の真直ぐな刃、きつちりと麻縄を巻きつけた丸い握り。黒く染まっているのは血の跡か。そして銃。手に取るとずしりと重く、激鉄に指をかけても幼く小さな彼女の指は食い込むばかりでびくりともしない。

傍らに誰か来て優しく語りかけてきた。小一郎の奇兵刀を手に取る……る。

「私は千鶴……」

数年後……

この男にとって、ぶん殴るとぶち殺すは同じ意味だ。たいした差はない。できればぶち殺したほうが気分が良いが、この男とて相手を心得ている。幕兵を、衆人監視のこの往来でぶち殺した日には、隊にまで迷惑が及ぼう。故に、ぶん殴るほうを選んだのは、この男なりに賢明な選択だ。だが、何を道具にぶん殴るかは俺の自由だ、と彼は思った。路のすみに手ごろな角材が見えた。が、既にその場は黒山の人だかりで、ふたりの幕兵と、恐れを知らず幕兵に喧嘩を吹っかけた少年を取り巻いている。とてもそこまで得物を取りにいけない状態ではない。

「貴様は浪士の類かつ」

「しょんべん臭いガキが、いきがりおって浪士気取りか」

「先ほどの非礼を謝れば許してやる」

「さあ、謝れ」

幕兵のほうは、二人がかりで、こんな元服もまだのような小僧と喧嘩するなど恥じだと思っている。脅して小僧が謝れば面目は保てる。

が、少年は別に浪士気取りではない。海援隊という部隊に所属している。元服も済んである。幼名は東一と言った。元服後は東夷と名乗っている。そしてもうひとつ。謝るような男ではない。海援隊では、狂犬東夷と呼ばれている。

その狂犬が吼えた。とても人語ではない。吼えた時には殴りかかっていた。

拳が幕兵の顔面を打った。鼻血が飛沫あたりに散る。

「小僧っ！！ もう許さんっ！！」もう一方の幕兵が抜刀しようと刀に手をかけた時には、跳躍しその幕兵の頭をつかみ横つ面に膝蹴りを食らわせていた。着地すると、即座に体を回転させ後ろまわし蹴り。鼻血を流した幕兵の顔面をさらにぶち碎く。

さて、その様子を通りに面した料亭の二階から見物していた海援隊諸士。やれやれ、というか、またか、といった表情である。

この中では一番頭にあたる陸奥宗光が傍らの侍に言った。

「おい、天谷。すまんがおんし止めてきちゃれ」もう、うんざりだ。と言わんばかり。

「任せい」言った時には既に飛び出していた壮年の男。陸奥は何やらいやな予感がした。

さて、通りでは既に幕兵が抜刀している。抜き身の白刃がざらりと光る。そこへ、先ほどの天谷が人垣押し分け飛び込んできた。こちらにも既に抜刀してある。

「馬鹿たれっ！！ 東夷っ！！ 何をしちよるか。敵は刀を抜いておるぞ。貴様もはよう抜かんかっ！！」

階上で陸奥が頭を抱えた。

「俺も行くっ」と元気良い声で東雲陸と言う少年も階下へ降りて行った。

一方、東夷は、敵の白刃ものともせず、ひらりとかわすや、敵後頭部にひじ討ち。軽い脳震盪を起こし痺れたようだ。つんのめったその身の腹を蹴り上げた。幕兵が転がった。いま一人が、天谷と剣を交えている。

「ジジイ、変わっちゃれ」東夷が声をかけても天谷は応じない。ジジイとは何事じゃ、とかえす。

そこへ飛び出してきた東雲陸は東夷よりも三つ下。十三歳である。役者の女形がやれそうなきれいな顔の少年である。元気いっぱい飛び出すと、ふらふらと頭をふりながら立ちあがってきた脳震盪の幕兵を、刀の峰で思いきりぶった。

天谷と剣を交える幕兵をちらりと見た東夷、にやつと笑うと、素早く動き、背後から足を払った。不意をつかれて幕兵は転がった。そのみぞおちに、膝蹴りを食らわせ、顎を踏み砕いた。

既に二人の幕兵は悶絶し地に這いつくばり立つことも叶わぬ様子。陸が東夷を見て嬉しそうに言う。

「こっちの奴は俺がやつつけたんだ」

東夷はふん、と鼻で答える。素っ気無い。陸は相手のそんな態度には慣れている。

「東夷が危ない時は、いつでも加勢してやる」意気揚揚と言う。

天谷は東夷をつかまえ説教をするつもりだったが、どうにも分が悪い。東夷が終いまで抜刀しなかったからである。これでは彼が喧嘩を煽ったことになる。近いが。

天谷はその身に維新の動乱が染みついているような男。その顔に刻まれた皺は、無数の名だたる動乱の歴史とも言える。が、生まれついてのその性分が変わる事はない。分別というものが、いくつになっても持てない親父だ。喧嘩になれば一番に飛び出して行く。

そして、東夷。狐目、ざんぎり頭、顔立ちは父に似ているが、背は高い。今日は着物を着ているが、着物を着るとつんつるてんになる。普段は洋装か水夫の服を着ている。ズボンを穿き。そちらのほうがよく似合う。が、外見がどう変わろうと、中身は狂犬。東夷が

岡に上がる、東夷が喧嘩するは、ほぼ同義語である。喧嘩の相手は常に幕兵。喧嘩で済まないことも多い。今日はこれで終わつたが、殺し合いになることもある。殺しあうとなればその判断は速い。躊躇うことなく刀を抜き、引き金を引く。

「どうやら、加勢が来たようだ」天谷の声にふりむけば、新たに十数人の幕兵が人垣を押し分けこちらに向かつて来ている。

「逃げるぞ」三人バラバラと逃げ出した。海援隊とは判っていない。料亭の連中に難が及ぶことはない。

「ここが下関でよかったね」陸が言った。何故なら、幕府の勢力下にある街で騒ぎを起せば、とても逃げおおせるものではない。
「とにかく、いったん散るぞ」落ち合う先はいつもの旅籠だ。

さて、その旅籠に、苦虫を噛み潰したような顔で陸奥がいた。手に一通の書状を持っている。

東夷は不遜な態度であぐらをかいている。天谷が仏頂面で腕組みをしておる。遅れて入ってきた陸は、その場の冷やかな空氣に怖気づいた。

片目眇めて陸を見た陸奥は、そろつたなと憤懣やるかたない口調で呟いた。

廠かに此度の喧嘩の沙汰を言い渡した。

「高杉東夷、天谷虎之助、東雲陸、以上三名、三日間船底の営倉行きだ」軽すぎる。解せぬ、といった表情の天谷と陸。東夷は他人事のように聞いている。軽すぎるとは、当の陸奥自身が一番感じている。が、彼等の下関逗留はあと三日。それ以後は東夷を自由にせねばならぬ理由がある。それが、今、彼が手にしている書状である。

「海援隊は喧嘩ご法度だ。東夷。貴様については、京にいる竜馬兄に俺は何度も相談した」その返事が来た。これだ。と、書状を畳のうえに放り出した。

「そこにはこうある。東夷、海援隊より除名のこと。なお、彼について行く者があれば、これは止めぬこと。四隻ある蒸気船のうち、

乙斗丸を東夷に与えること」

これには仏頂面の東夷も目を丸くした。乙斗丸は一番小さいがアームストロング砲も一門ついている軍艦だ。

どういうつもりだ……？ 訊ねる目を向けると「わしが聞きたいわ」と陸奥。至極、機嫌が悪い。当然か。天谷、陸の顔を見れば目を輝かせ興奮状態だ。

ついて来るンだろうなあ、こいつら。

三日後、晴れ晴れとした表情で営倉から出てきた天谷、陸、そして無愛想な東夷。

「これから、どうするンだ？」隊士が聞く。船をもらっても海運業などしなければ軍資金は入らない。石炭も買えない。

東夷は他人事のように答える。

「知らん」お天道様に聞いてくれだ。船を降りた。思った通り、天谷と陸が大きな荷物を抱えあとをついて来る。その後ろに意外な人間を見つけた。洋装でボストンバッグを引きずりながらあとをついて来るのは、船医の桜井頌江である。

「ちよつと待て」東夷は踵をかえた。桜井の正面に立つ。相手は何か問題でもあるのか、といった涼しげな顔。海風が桜井の前髪を撫でていく。

「あー、いや、勿論お前がいてくれると心強いが、……何故じゃ。理由を聞いてよいか？」

桜井は何をわかりきったことを、といった顔で答えた。

「面白そうだから」他に何の理由がいる？

東夷、天谷、陸の顔色が蒼ざめた。

同様の理由で付いてきた者が、もう一人。奇兵隊を抜けてきた外松。人相は極悪人だが、やさしい男だ。子猫を飼っている。

乙斗丸の水夫たちは戦々恐々だった。東夷の行状は知らぬわけがない。天谷の親父もいるという。こいつ等がまっとうな航海などするわけがないのだ。まず、普通の海運業で地道に、ということはあ

り得ない。思いつくのは、海賊。幕府の舟ばかり襲う海賊。石炭も食糧も金も、そうやって調達するに違いない。

東夷は貰った船の前に立った。かもめが舞い飛んでいる。これからどうする。奴はどういうつもりで、俺にこれをくれた？ 少なくとも、今乗りこんで行った人間、四人と猫一匹、そしてクルーの命は俺の責任となる。それをやってみせろと言うのか。それとも、幼少時、この内戦は長引くぞ、おまんが長じてカタをつけると、口癖のように聞かされた、カタをつけると言っているのか。討幕せい、と。

俺を突き動かすこの衝動はどす黒い。俺には公平な考え方など出ない。俺がカタをつけるべきではない。空を仰いだ。

お天道様に聞いてくれ。

同時に舟の名前が決まった。

オテント丸。

千鶴

さらに、数年後。

山中のさらに山奥深く、木の枝にぶら下げた的を相手に、銃の練習をしている少女がいる。右手で三つの的を撃ちぬくと、即座に左手に握り替え、同じ的を撃つ。的は揺れているが、お構いなしだ。再び撃ちぬかれ吹っ飛ぶ。

「まだ、まだだ」少女が呟く。もっと、もっと……。
少女は千鶴だが、幾分印象が違う。男勝りと言っても良い。凛々しくさえも見える。

一四歳になった。弟の良太と、母の香枝と三人で暮している。父のようになりたいと望んでいる。小一郎のように。強くなりた
いと。家族を護るため。

下関。

至るところに尋ね人や人相書きの立て札が立っている。生き別れた者の名を記し、安否を、連絡を乞う。それは戦禍の長州で珍しい光景ではない。消息の知れぬ家族や恋人を捜して。例えば、娘に宛てて、父は芸州口に居る等……。

それら林の如き立て札の中に埋もれるようにして、ひっそりと古びた札が立っていた。香枝、会いたし。この札、気付けば逗留先を記されたし。小、

芸州口。

一時の間に合わせに造られた粗末な家が、低い軒を連ねて並んでいる。狭い路地が迷路のように入り乱れている。同じ造りの住居の入り口は、どれも身を屈めないと入れないほど低い。間に合わせに造られたそれらの住居に、もう十年、人々は住んでいた。芸州口避難者収容所である。

暗い路地裏で裸同然の格好で遊んでいる子供らがいる。既に、スラム化している。

長州へ、帰れる者は既に帰った。ここに残っているのは、帰るあてのない人々、帰れない理由のある人々。

萩は幕軍に占拠されたままである。萩以北にもその影響はある。対する、長州側は、山口の政治堂に毛利敬親があり山県狂介を隊長とする奇兵隊が護っている。小倉藩に対しては、下関に伊藤俊輔を隊長とする奇兵隊が睨みをきかせている。この状態で、双方にらみ合ったまま身動きが取れない。

故に、萩避難民は萩へ帰れない。ましてや、賊、斑の狗の一味と目されている人間はさらに。

薄暗くなりかけた夕暮れ時、暗い路地裏で男が一人の少年の行く手をふさいでいた。浪士風の男である。少年が逃れようとすると男は手をつかんだ。その時、凜とした少女の声が響き渡った。

「良太っ!!」

「お姉っ!!」良太が叫ぶ。男の手をふりほどいて千鶴のもとへ駆けてきた。

「誰!? あんた」千鶴が男に詰問する。

男は「道を訊いただけだ」とぶっきらぼうに言つと脇を抜け立ち去って行った。

その後姿をキツと睨みつけている千鶴に、良太は言った。

「違うよ。兵隊にならないかって、奇兵隊に入ってたんだ」

良太は満十歳になる。体も大きい方だ。目にとまったんだろ。

あらためて、男の消え去った闇を睨みすぎる千鶴。

その奇兵隊は、おそらくまともな奇兵隊ではない・・・。

自分たちの家へ帰ると、丁度野菜売りの御婆さんが来ていてあがりかまちに腰掛け香枝と話してこんでいた。聞くとはなしに耳に入る。昨日も三人さらわれた。今ごろ、ひどい目にあつておろう。むごい事よ。

「猿回しが、自分の猿に一番はじめに何をするか、知っておるかえ。

猿というのは骸骨が硬く、鉄の棒で打つても死なぬ。猿回しは固い棒で猿の頭を打ちまわすのさ。そりゃあ、ひどい目にあわす。そうやって、最初に徹底的に恐怖心を与え絶対服従させるのさ。奴等も同じことをやっておるよ。決まっとる。子供たちを打って阿片を吸わせて思ふ通りにするのさ」

聞きたくもない話だ。ここ、芸州口では聞き飽きた話だ。千鶴はただいまも言わず、良太の手をひき奥へ入っていった。と言っても奥に部屋があるわけではない。この家は一間しかない。一張だけある蚊帳を引っ張り出し低い天井につるしていった。

張りおえた頃には、野菜売りの御婆さんは帰っていった。お宅の息子さんも気をつけなさいよと言い副え。

「あら、もう蚊帳をだしたのね」香枝が言った。

うん、生返事だ。

「いやな話を聞かせて悪かったねえ」

「いや、あの御婆さんが話好きなんだ。それより、さつき良太が・・」男の話をした。

香枝は驚き、無事を喜び、幸運を喜んだ。もしも、千鶴が通るかからなかったら、さらわれていたかもしれない。

「大丈夫だよ。そんなにやばそうな奴じゃなかったから」ここに来る浪士は多い。勤皇思想を説きに来る浪士もいれば、刃傷沙汰を起して逃げ込み潜伏している者もいる。刃傷沙汰とは大抵、幕府の誰それを斬ったとかである。奇兵隊の勧誘も来るが、中にひとさらい同然の奴等がいる。

「俺、赤い筏だったら入りてえなあ」近頃噂の海賊団だ。

「駄目」

「馬鹿をお言いでないよ」千鶴と香枝に同時に言われて良太はしゅんとしよげた。

駄目とは言ったが、その海賊団の名は千鶴も知る。その活躍の噂を聞くのは好きだった。

それは、幕府の舟ばかり狙う海賊団。名乗ること『赤い筏』。

東夷

夢の中で東一は船上にいた。祖父が彼の体にロープを結び付けている。ロープの先は船尾に目立たぬよう結わえられている。奴らが去るまで決して上がって来るでないぞ。祖父はそう言い含めると東一を海に投げ下ろした。波間から見上げると近づいてきた一艘の船から、バラバラと武装した男達が乗り込むのが見えた。聞こえてくる罵声と悲鳴。夢の中で東一は思う。またあの夢だ。この後どうなるか、彼は細部に至るまでよく知っている。塩辛い海の味まで口の中に蘇る。

船が去った後、彼はロープを手繰り甲板に戻った。累々たる屍の山。血で洗い流された甲板。そこに母がいた。幽鬼の如き表情で、その目はこの世を見据えていない。胸に刀傷があり血がドクドクと流れ出ている。母上つ、東一は小さく叫び駆け寄ろうとしたが臆して足が動かない。声に気付き、母は、居ずまいをただし座しこう言った。それは彼のよく知る優しい母の声ではなく、まるで冥界の声のように聞こえた。

「東一よ、……母は穢れました。もはや……憎むべき敵は幕軍……東一……生き延びよ。……そして討て。憎むべきは幕軍……そして忘れるでない。そなたの父は高杉晋作。長州藩士。忘れるな。そなたの父の名は高杉晋作。母の名はマサ。……生き延びよ。そして必ずやこの恨みを……」短刀を手に取った。

「既にこの船には一滴の水も食料も無い。……東一よ。……この母を糧に生き延びよ」

母上、止めて。そう叫ぼうとするが声がでない。母は短刀を深々と己が腹に突き立てると、苦悶の悲鳴を押し殺し、こぶしを腹の中にいれ己が肝臓を取り出した。握り締めた肉片を東一の方へ差し出すや、絶命した。

長い時間が過ぎた。東一はじつと蹲ったままだった。暑い夏の日差しが船上を焼いていた。一日が過ぎた。例えようもない飢えと渴きが彼を襲ったが、母の遺言に従うことは出来なかった。何もかもが恐ろしかった。母も。

むせかえるような血の匂いの中で二日目。彼の心に憎しみの炎が芽吹いた。それはどす黒く彼を覆い、彼そのものとなった。憎むべきは幕軍。念仏のようにその言葉を繰り返した。

そして三日目、「生き延びる」そう心に決めた。必ず生き延びて幕府を倒す。彼は立ち上がった……。

目が覚めた。ひどい寝汗だ。またあの夢を見た。東夷は起き上がり宿屋の窓を開けた。まだ夜半だ。寝静まる瓦屋根が闇の中沈んでいる。

糞畜生。忘れることなどできない。忘れることができない以上、俺は怨念に突き動かされる。俺を襲うこの衝動は怨念だ。瞋恚の火だ。怨敵討つまで妄念はない。

新居浜

萩。

古い立て札がある。

「左記の者、斑の狗の一味につき、手配中である。左記お尋ね者見つけし者、心当たりのある者は、即刻届けられたし。奇兵小一郎、水戸藩士鮎沢伊予乃介、茶屋娘香枝、同茶屋下男作蔵……何れも生死不詳にて、憶えおかれたし。届出に対し生死は問わぬ」紙は古び、野ざらしになり文字も薄れている。その札をまじまじと見ている者がいる。

身の丈ほどの鉄の棒をついた若い男だ。名は新居浜。自ら西国一の貧乏浪士を名乗る。大抵、脱藩者や浪士の類は貧乏で当たり前だが、刀くらいは持っている。否、持っていないければ話にならない。ところがこの男、刀すら持っていない。得物は先の尖った鉄の棒のみである。この棒一本で殺めた幕兵数十人に及ぶ。

無論、彼自身も賞金首であるが、そんなことには無頓着であるようだ。右も左も敵だらけの萩に来て、堂々と往来を歩いている。

一軒の酒屋に入った。客は幕兵だらけだ。酔いどれ共が一斉に彼を見る。彼は一見して浪士と判る姿。しかし新居浜は気にもせず、どつかと腰を下ろし店主に酒を注文する。店主がすすと寄って来て、小声で忠告する。

「いずこの浪士様が存じませぬが、危のう御座いますよ。早々に立ち去られたほうが」

新居浜も小声で答える。

「えっ、刀を持たぬ丸腰の者を幕兵は討つと申すのか？ 恥知らずばかりじゃの。ともあれ一杯飲んだら出てゆく故、早く酒を持って来てくれ」

店主の運んできた冷酒を彼は一気に喉に流し込む。それで勘定かと思いきや、

「店主、もう一杯所望したい」再び店主が寄つて来て、浪士様、約束が違います。一杯飲んだら帰られると先程申されました。と言う。「うん、言った。確かに言ったが、あれはしらふの俺が言ったこと。今酒を注文しているのは『一杯飲んだ俺』だ。まあ、許せ。早く酒を持つて来い」店主は店がむちゃくちゃに荒らされるのを覚悟した。既に幕兵たちは殺氣立っている。

新居浜は二杯目を喉に流し込むと、傍らの棒を手に店内を見回した。ひい、ふう、みい、よ、幕兵の数は九人。狭い店内に狭い入り口。奥は厨房でその先は店の者の住居であるようだ。どう戦つて、どう逃げようか。あの店主に怪我させちゃ気の毒だ。奥には家族おるかも知れぬ。

「さてと、」と、すつくとその長身を椅子から起こすと、兵等も一斉に椅子を倒し立ちあがった。一触即発。新居浜は間の抜けた声を装い言った。

「亭主、勘定」へい、へい、と奥から出てきた店主を制し、兵の一人が言った。

「待たれい、いずこの藩士か、藩名と名を名乗ってもらおうか？」
「勘定の後じゃまずいか？名乗れば食い逃げとなるは必定。もつともお主ら全員叩き殺せば、悠々と払えるか、あつ、そうか、そうだな」新居浜の人を喰つた答えに全員激怒し抜刀した。その時である。新たな客が入ってきた。退路と考えていた入り口を塞がれ、新居浜は内心焦った。しかし。

入ってきた男達は、これも浪士であつた。狐目の若い男が一人、壮年の男が一人、十五・六の少年が一人。いずれも店の入り口で、中の様子を驚いている。

「見たところ、十対一で丸腰の男を殺すつもりのようにや。萩の幕兵、聞きしに勝る勇ましさよの」狐目の男が言う。火に油を注ぐつもりらしい。店の主は観念した。もうこれで店はおしまいだ。

「陸、店の入り口を塞げ。退路を断て」少年に命じると、壮年の男と共に刀を抜いた。

なんだか知らぬが、面白そうな男だ。尖った鉄の棒を手に新居浜は思った。

「あんだ、何もんな？俺の名は新居浜。あんたは」

「高杉東夷、それからこのオヤジは天谷」

「ふーん、まあこれで、三対九になった。礼を言う」新居浜が言う

「四対九だっ！」背後から少年が口を尖らせ言う。

「店の主が気の毒じゃから、なるたけ人だけ斬って、椅子とか机とか店の物は斬らないように」店を気遣い新居浜はとぼけた注意点を述べる。「店主っ」と大声で呼び「皿くらい割ってもかまわぬか？」と聞くが、当人は既に裏から家族と逃げている。

さて、双方対峙してある。刀も抜いてある。なのに一向に斬りあいとならぬのは、なぜだ。新居浜はそれを己が所為とはまったく気付いていない。

「よし、始めよう、さあ、」と言うが敵は少々しらけ気味である。

東夷が拳銃を新居浜に投げてよこした。

「お前の得物じゃこの狭い場所では不利だ。これを使え」そうは言われても、自慢じゃないが西国一の貧乏浪士、拳銃など触ったこともない。

「無茶を言うな。どうやって使うんだ？」陸と呼ばれた少年が寄つて来て口早に説明する。これが激鉄、これを起して引き金を引くんだ。よし、解つたと、言われた通りにやってみた。轟音響き幕兵一人を撃ち抜いた。それが文字通り引き金となり、双方入り乱れての乱闘が始まった。新居浜は始めて撃った拳銃に感動し「でたん、凄い」といたく気に入った様子。敵に狙い定めたて続けに引き金を引くが、すぐさま「東夷、この銃、弾が一発しか入っておらん」と慌てて言う。再び陸が説明し、一度撃つ度に激鉄を引かねばならぬことと理解した。

「そうかつ」とたて続けに乱射し、やっぱり凄いと感心している。もつとも初めての事ゆえ、殆ど敵には当たっていない。全弾撃ち尽くすと懷にねじ込み、次々打ち下ろされる白刃を例の鉄の棒で受け、

弾き返し、打ち倒し、倒れた敵を貫き串刺しにし、その屍を飛び越えて敵を突く。

東夷はといえば、椅子を投げつけ敵が払ったところを狙い腹に白刃突き立てる。そのままズバツと横に掻つ捌き、飛び出た内臓を引きちぎり敵に投げつけ、これまた怯んだところを喉掻つ捌きに懷に飛び込む。なんとまあ、惨い戦いぶりじゃ、鬼のようだ。新居浜は感心した。その足元に今しがた東夷の斬った首がゴロンと転がってきた。昔、高杉晋作が、走る犬の首を無造作に切り落とし「凄腕の腕」と呼ばれた、その逸話をチラリと思い出した。東夷は無言でその首振りかざし敵を威嚇するや、やおら投げつけ、「よし、逃げるぞ」と合図した。既に敵は気圧されて向かって来る者はいない。

四人は店から出て足早にそこを逃れた。先程東夷の振り回した首から進った血で、全員、血に塗れている。通りを行く人々が悲鳴をあげる。

「うるそうて敵わん、川へ行つて血を流そう」天谷が根をあげた。

隠れるのに丁度良い橋の下で、全員川の水で血を落とした。着物が濡れているのは仕方ない。

「怪我はないか」東夷が新居浜に聞く。

「大したことはない。二の腕を少しばかり斬られた」と腕を見せる。

「船に帰れば軍医がいる。ついて来るか」船？ 軍医？ 新居浜が訝しがっている。

天谷と陸が意味ありげにニヤニヤ笑う。天谷が、

「東夷、この男、暴れる場所を探しておると見た。俺は賛成じゃ」と言った。東夷は苦笑いを浮かべ、新居浜に言った。

「俺達は海賊『赤い筏』。船には軍医の他にもう一人仲間がおる。お前も仲間にならぬか。目的は討幕だ」新居浜は魂消た顔して答えた。

「ひい、ふう、みい、俺を入れて四人。たった四人で幕府を倒すつもりか？」

陸が口を尖らせ言う。「五人だ」新居浜の今の勘定では自分が入っていない。

「一人、値百騎の男が欲しい。つまり兵四百に値する」

「兵五百だ」再び、陸が口を尖らせ言う。東夷の勘定にも自分が入っていない。

「よしよし、お前は多めに見て値五十騎じゃ」天谷が笑いながらなだめる。

新居浜は考える。一人百騎は大げさにしても、今のこいつ等の戦いぶりを見たら、五人で百は相手にできるかもしれない。それにしたって凄いいことだが、後にこの新居浜、わずか三人（しかも内一人は娘子）で数百の幕兵相手に民を護って戦おうとは、この時はまだ知る由もない。

「どうだ？」東夷が問う。

「是も否もない。こげな愉快なことはないじやろう。では、改めて名乗る。俺の名は新居浜麻毘、自慢じゃないが西国一の貧乏浪士、生まれは福岡藩边境の遠賀川沿い、小倉藩との国境。得物はこの尖った鉄の棒一本のみ。この棒を以って殺めた幕兵……くそっ、数えとらん。数えときゃあよかった」名乗りあげが格好つかずに終わって悔しがる新居浜を笑いながら、それぞれ名乗った。

「俺は高杉東夷、父は晋作長州藩士毛利家恩古の臣、号東行」

「俺は東雲陸、東雲と書いてしののめと読むんだ」と、少年。

「俺は天谷虎之介、新居浜とやら、歓迎するぞ。それから一言忠告しておく。一番恐ろしいのは敵兵でもなく、我らが大将この東夷でもなく、軍医だ」

「？」

「とにかくその傷見せれば解る。さあ、行くでしょう」

写真

龍馬は三岡八郎に会いに来た。

「松平春嶽老に会って来た」

久しぶりの客を三岡は歓迎した。

「老いたな」素直な感想を述べた。松平春嶽である。

「そうか……」酒を勧めながら三岡が答える。

「やはり公武合体を願っておるが、難しかろう。何しろ長州があ
の有様じゃき。しかも、井伊亡き後も変わらず幕軍は強い。井伊存
命中に米国より武器供与を受けた故にじゃ。しかも、昨今はフランス
国の軍事介入を許す流れもある」

「ほう……」三岡はつい最近まで春嶽により謹慎処分にあ
ったゆえ世情に疎い。

「列強がアジアを植民地とする際の常套手段じゃ。うまい具合に米
国は国内で戦争が起こり今は日本どころではなくなったからよかつ
たようなものの」

「だが、取って代わったように仏国が出てきた。ナポレオン三世じ
やな」

「幕府側も阿呆じゃ。米が手を退くなら仏とは、安易。小栗案じゃ。
もし奴が中央に居ればその話、矢が飛ぶ勢いで進むじゃろう」

「小栗はまだ小倉にあるのか？」

「ほうじゃき、まだましじゃ。じゃが奴が小倉城におる故、九州諸
藩は身動きが取れない。しかも海峡を睨み下関に侵攻しようとその
機会を虎視眈々と狙っておる」

「暗い話ばかりじゃのう、萩はどうなっておる」そう聞かれた竜馬
の顔が一層曇る。

「それよ。幕末、既にわしはそう呼んじよるが差し障りあるまい？
萩における豊永こそ、幕末最大の奸物じゃ。己が出世の為に罪なき
民を虐殺し奇兵であつたと偽り、井伊亡き後は、長州征討軍指令官

じゃき。西南雄藩のなかに獅子身中の虫が二匹ある。一匹は小倉城に、もう一匹は萩城にデンと腰を据えておる」

「なるほどの……土佐、薩摩は？」三岡は連合諸藩の名を出した。

「動けぬ、今はまだ」

「何故か？」

「両藩ともに、討幕にあたり朝意という大義名分がある。今のところ京の帝は傍観しとうきに」

「なるほどのう……ところで水戸はどうじゃ。風の噂に水戸藩受難と聞いた」

「それよ、井伊暗殺後、幕府の水戸に対する仕打ち、とても親藩とは思えぬ惨さじゃ。次期將軍と目されていた水戸藩ゆかりの一橋慶喜の永蟄居始め、名立たる要人の謹慎、登城差控え、尊皇派藩士の切腹、死罪、獄門、並びに、次々押し付けられる無理難題。水戸藩士らの無念、今では天を突かんばかり。残念でならんのは、一橋慶喜が將軍職に就いておれば、仏国の内政介入も許さんかったと思われること……。彼ならば徳川家存続よりも、日本国全体を考えることが出来たじやろうと俺は思うちよる……。ところでその水戸に、実は一月ほど前行ってきた。何人かと話をしたが、中に一人、人物がおった。大物じゃと思うが物静かな男で、この龍馬の物差しを以ってしても計りきれん」

「ほう、どんな男で名は？」

「匡家としかわからぬ。隠居同然の暮らしをし、滅多と人に会うことは無いそうじゃが、不思議とわしは歓迎されたようじゃ。一晚酒を酌み交わしたが、後から思い返したら、語ったのはわしばかりで奴は笑みを浮かべて聞くばかりじゃった。この龍馬が手玉に取られて腹の中をすっかり見られた。あんな経験は初めてじゃ。語るに実に心地よかった。今、おまんと話しとるようにな……」

その夜、龍馬と三岡は八時間にも及び語りあい、翌朝龍馬は発つた。立ち去り際、龍馬は懷から出した物を三岡に手渡した。自分の

写真である。照れくさそうに、

「貰うてくれ」と言った。三岡は蓬髪を束ね彼方を見て立つ写真の中の龍馬を見、不吉な予感がした。

暗殺

京都。街なかの茶店という茶店に、『長州はぎ 参拾七文』という看板が立っている。遠く萩の地で一軒の茶店が始めた長州はぎが、今、京の地で流行っている。勿論、買う時の「まけてくれ」「いいえ、はぎはまけません（負けません）」も、そのままに。京の人々は長州びいきだ。

他に流行っているものといえば、『ええじゃないか』。ええじゃないか、と言つて踊れば何をしても許されるという。尾張地方から始まったこの、ある種静かなる打ちこわしな一揆は全国に広がり、様々な噂が尾ひれをつけ飛びかっている。いわく、奇瑞が降ると言う。諸国神々のお札から始まり、米、大豆や小判に至るまで、人々が踊り狂うと空から降ってくると言う。田植えから十六日あまりで穂が出たとか、十一月上旬に麦の穂が実ったとか、そういった類の奇瑞の話しもまことしやかに噂された。殆どが信じ難い話でただの噂であろうが、中には人々を扇動しようとして米やお札を降らせた討幕派浪士もいたかも知れぬ。

今、京の町並みは寝静まりつつある。家々の黒い影が夜空の下に沈んでいる。一軒の民家の、二階の窓が行灯の灯にほのかに照らされている。家人が階下の騒々しさに「ほたえなっ！（騒ぐな）」と大声で怒鳴りつける声が聞こえた。次の瞬間踏み込んだ刺客に、怒鳴り声をあげた男は頭を斬られた。男の刀は少し離れた所にある。男は倒れながらその刀を掴み、鞘を抜こうとした。そこを、二太刀目が肩から背中を斬り裂いた。それでも男は、気丈にも鞘も抜かぬまま手向かった。その鞘ごと頭を薙ぎ払われた。同じ部屋にいた今一人の男も、暗殺者数人に取り囲まれ、何度も刀を突き立てられている。既にその身体はぐったりして、虫の息である。もうよい、行くぞ。指揮官らしき者が言い、暗殺者達は去った。

男達はまだ息があった。頭をやられた男が、部屋の入り口へ這って行き階段の下に向かい「医者と呼ば」と言った。しかしその声、力なく、何処へも届かない。応ずる声もない。男は自分の頭をさわってみた。手に脳漿がベツトリ付いてきた。男は柱に身をもたれ、

「中岡、おりゃあ、もうあかん・・・・・・。脳をやられちやる・・・・・・」童のように微笑み言った。それが最後の言葉となった。

それが、龍馬と、中岡慎太郎の最後だった。

出立

「下関へ、行つて来たいんだけど」おずおずと千鶴は切り出した。朝の炊事の途中である。

「また、かい？」努めて平静を装い香枝は答えた。目的は、わかっている。それだけじゃない。隠れてこの子が何をしているかも。つまり、小一郎の銃を時々持ち出していることを。だが、深くは聞かない。この子は、この子の天命に従い生きている。私が口を出せることじゃあない。

「気をつけて行くんだよ」本当の親子ではない。だから簡単に許せると人は言うかも知れない。けれども違う。不思議な縁えにしで私達はつながっている。どう説明して良いか分からないけれど、この子は私が母親で小一郎が父親だと信じている。誰も、そんなふうに教えないのに。

その昔、この国が虐殺の嵐に見舞われた時、偶然出会った二人の男が義賊となり民を救った。全ては偶然で強い縁えにしでつながっている。この子が、自分を小一郎の子だと信じているのも天に思うところありなのだろう。だから、止めない。若い娘の一人旅を。

母親の許しを得ると、千鶴はその日のうちに出立の準備をはじめた。

「俺も行ってえなあ」恨めしそうに良太がその様子をながめている。「あんたまで来たら、誰が母さんを護るのさ」いつも言うセリフだが、弟を引き下からせるにはこれが一番だ。

下関までは、娘姿ではなく、男装で行く。奇兵隊の制服を持っていく。黒い上下。詰襟と黒いズボン。そして独特な陣笠。拳銃が二丁。一丁は小一郎のモノ。もう一丁は白石正一郎に貰ったもの。

その白石の店に行きたい。幼い頃から出入りしていて、練習で弾が無くなると貰いにいつていた。先日、小一郎の残した人消しという銃を預けた。修理とその弾を作ってもらう為。もう、出来ている

頃だ。それから自分用の鎖帷子・・。

出立の準備が済むと、千鶴は陣笠を深くかぶった。顔が見えないように。

「これを」香枝が小一郎の奇兵刀を渡した。千鶴は無言で受け取った。

家を出て、数歩歩いてふりかえった。香枝と良太が手をふっている。小さく手をふり、かえした。ざんつと背を向けるとあとはふりかえらず去った。十年近く住んだ見なれた町並みを突っ切った。まさか、これが見納めになるとは思ってもいなかった。

星と花

竜馬暗殺の報にも、東夷は悲しみを面に出さなかった。ただ、逝ったか、とのみ呟き東の空を仰ぎ見た。長くはあるまいと思っていた。彼の人の剛毅豪胆なふるまいをよく知れば。ただ、自分の方が先に逝くと思っていた。見上げた空にひとときわまばゆい星のあったそれが、竜馬のように見えた。俺がカタをつけるべきじゃない。と目をそらした。まだ、言い訳をしている。

既に、海援隊と薩摩藩が暗殺者捜しに躍起になっている。彼等も針路を東にとり、京都を目指す。

晴蔵はその少女を見るたびに、不憫に思う。その子には幼い時の記憶がない。血のつながらない香枝を母と信じ、行方の知れない小一郎を父と信じている。何故、そう思うようになったかは知らぬ。そのいきさつは解らぬ。おそらく、葛藤の末起こった劇的な精神の変化だろう。過去の残酷な事件の記憶を消し、新たな人格を得た。「狸が食いたいな」その子が言う。晴蔵は笑いながら答える。

「先月撃ったゆえ、しばらくは近寄らぬ。干し肉ならあるが」

「それでいい」無邪気に受け答えているが、以前のあどけなさが消えている。大人びてきている。この年頃の少女は刻々と変化する。花がひらいてゆくように。だが、この子の場合は悲しい花だ。行く手に血と戦いの匂いがする。

「何故、引越した？」またその話か、と晴蔵が苦渋の笑みを浮かべる。もし、昔の小屋を引越していなければ、小一郎は容易に香枝達を見つける事ができたかも知れない。彼の小屋が、香枝達と小一郎を結ぶたった一つの接点だった。だが、あそこも幕軍に踏み込まれる寸前だった。すんでに逃れ難を避けたのだった。

「しかたのないことじゃ」それよりも……、逆に問い返し

た。

「小一郎がまだ生きていると・・・・・・？」信じておるのか。

「勿論だ」千鶴は少し憤った顔を見せた。

晴蔵は話題を替えた。

「その髪は誰に切ってもらった？」西洋人の男性のような髪型を言った。散切り頭というやつだ。近頃では、日本人も真似する者が多い。

「おつ母だ」男に見えるように、と。頼んだのは彼女だが。

誉めようがなく晴蔵は再び話題を替える。

「一口に井戸と言っても、大井戸はじめ色々な種類があるが・・・

・・・」

「もう聞き飽いた」茶碗の話は。

砲火

「薩摩藩も諸兄も血眼になって暗殺者を捜している」外松が言った。諸兄とは彼らのもといた海援隊である。

「壬生の浪士が見当たらぬ。姿をついぞ見かけなんだ」内心、一戦交えようと楽しみにしていた新居浜。

「街道を幕府軍が進軍しておった。半端な数ではない。おそらく新撰組も従軍しておる」天谷が、新居浜の疑問に答えた。

「幕軍が？」東夷の目がつりあがった。

「幕軍はどこへ向かっているんだ」陸が口を挟む。

「判らん」

情報収集に散っていた中間達が戻ってきた。口々に己が見てきたことを語った。

「どうやら、暗殺者捜しどころではないようだ。幕軍はどこへ向かっている？ 嫌な予感がしたのは東夷だけではない」

突如、何の前触れもなく、自国領土内に布陣した幕府軍に、広島藩は猛烈に抗議した。が、いくら抗議しても、その大軍が撤退することはなかった。長州との国境沿いに陣をかまえると、銃口を、大砲の筒を芸州口避難民収容施設へ向けた。

香枝はまどろみの中にいた。浅いその眠りのなかで、夢を見た。どこか知らぬ、小さな川のほとりで、小一郎を前に立っている。小一郎も、自分も、出会った頃と同じ顔をしていた。良太と千鶴を後ろに立たせ、彼女は誇らしげに言う。

「どう、小一郎様。わたし、頑張ったのよ」小一郎がその大きな手のひらで、彼女の頭を頬を撫で、よく頑張ったと言う。辛かったろう。と言う。その言葉に夢のなかで泣きながら責めた。「どこをほ

つつき歩いていたのですか」

地鳴りのような音に、夢は途切れた。ハッと彼女は身を起した。また聞こえた。もう夕暮れ時だ。いつのまに寝てしまったのだろう。それよりも今の音は？

再び、今度はもつと近くで。大地が揺れる。

表へ飛び出した。あたりいちめん土煙でいっぱいだった。空を見上げると大砲の弾が飛んできて家々の屋根を碎き、白煙舞い上げていた。

一瞬にして、何が起こっているか理解した。いや、解つてなどいない。けれど、彼女のとする行動はひとつだけだ。

「良太あつ！！」彼女は必死で叫んだ。

火矢が放たれている。きな臭いにおいと、ぱちぱちとはぜる音がどこからか聞こえてきた。遠く屋根の上で舞う火焰が、ちらりと見えた。

「良太あつ！！」声をからして叫んだ。路地を駆けながら。土煙。前が見えない。火の手がすぐそばまで来ている。駆けながら声を限りに叫んだ。

おつ母つ。砲火の奥で遠く聞こえたその声を、彼女が聞き違える筈がない。

「良太あつ！！」声の聞こえた方へ駆けて行く。銃弾の音が絶え間なく響き渡る。崩れた家から土煙が舞いあがる。人々が逃げ惑う。土煙を吸いこみ叫べない。むせて声が出ない。が、土煙のなかにかいま見えた我が子の手を見間違ふことはなかった。その手を必死でつかんだ。

陽動作戦

広島藩は、民間人に対する戦闘行為を激しく非難し、幕府軍の即時撤退を求めた。抗議の声は英国からもあがった。英国総領事パークスが、大君への面会を求め、今回の虐殺行為を非難した。

それに対し幕府側は、現在、あの非難民収容所が反政府組織の温床となっていること。反政府的思想の輩が、子供等に反政府的思想を説き、また、自身らの浪士隊へ引きこんでいる、うれうべき状況であることなどを、今回の武力行為の理由として回答した。

三度笠を深くかぶった男が、芸州口へ向かっていた。まだ、かの地の悲劇は知らない。男は長州中を、人を捜して旅している。今、芸州口へ向かう途中だった。が、前方から次々と避難民のあらわれ、何事か事変の起こった只事ならぬ様子に気付いた。一目で戦禍を逃れてきた人々とわかる。

男は歩みを速めた。街道はごった返している。流れに逆らい歩を進めるがなかなか思うに任せない。

背後から、凄まじい勢いで奇兵隊本隊が進軍してきた。全ての戦力を集結して向かっていると思われた。何事が起こったのか。心がせく。

その馬群の丁度反対側を、香枝が良太の手を引き、すれ違っていた。

洋上。軍艦オテント丸は西へ針路をとっていた。東夷は船のへさきに立ち、腕を組み前方を炯炯と鋭く睨み据えている。惴然とした顔つきで殺気を孕んでいる。幕軍の卑怯な行為を許せない。既に、芸州口攻撃の報は聞き及んでいる。その先の奴等の狙いが見えた。卑劣な陽動作戦。芸州口攻撃に奇兵隊は全戦力を結集して戦地へ向かった。幕軍の本当の狙いは、下関。

わずか数キロの海峡を挟んだ小倉藩には小栗が大軍を駐留させてある。手薄になった下関を狙う筈。

今、オテント丸は、芸州口沖合いを走っている。猛火に包まれた町並みが遠く見えるが、東夷は目もくれない。下関まで、あとどれだけかかる。間に合わない。

船室では、天谷はじめ外松、新居浜、陸が膝つきあわせて今後自身らのたどる運命を語り合っていた。

「まず、間違いなく下関へ突っ込むつもりだ」眉根を寄せて外松が言う。頷く天谷。

「頭となつて多少圭角とれたとはいえ、まず間違いないだろう」

「俺達四人だけでか？」新居浜が聞き返す。言葉と裏腹に、なにやら愉快げな口調だ。

「五人だ」新居浜の勘定にまたも自分が入っていないと気付いた陸が抗議する。

下関市街戦

街道行く手を次々人が逃れてくる。ある者は着の身着のまま。ある者は大八車に家財道具詰めこんで、一様に慌てふためいて駆けてくる。

千鶴は陣笠深くかぶったまま、それら人々の流れに逆らい下関へと向かう。既に、かの地で何事が起こったことは明白だ。それがなにか。彼女は嫌な予感に唇噛みながら先を急いだ。芸州口で起こったことを彼女はまだ知らない。しかし、彼女の向かう先下関でも何事が起こったようだ。

人々の中に奇兵隊隊員の姿もある。馬上の奇兵隊員が逆方向へ向かう彼女へ言った。

「撤退だ。山口の政治堂へ集結せよ。急ぎ戻れ。一時撤退だ」

千鶴はその言葉を無視して駆け出した。

「おい！！ 戻れ」馬上の奇兵は言ったが、従わぬのを見て取ると、呆れ立ち去った。

千鶴が下関にたどり着いたとき、既に日は落ちていた。暗くなりかけた市街地のあちらこちらから、銃声が聞こえていた。彼女は銃を抜いた。暗い路地を選び、身を潜めて入った。心臓が早鐘のように鳴っている。その引き金を引くことがあれば、それは彼女のはじめての人殺しとなる。引き返せない修羅の道へ踏み込んだこととなる。

路地から路地へ渡り駆ける。物陰から充分注意を払って大通りへ出る。目指す白石正一郎の小倉屋はもうすぐそこだ。激しい撃ち合いの音がしている。角を曲がる。

奇兵数名と撃ち合っている幕兵の背後に出た。幕兵は五人。とっさに手があがる。銃口を敵に向け引き金に指をかけた。いやだ。一瞬、躊躇した。敵がふりかえった。目が合った。音が遠く聞こえる。耳の横を走る血管がドクドク脈打っている。はじめての動物的。幕

兵はライフルの銃口を彼女に向けた・・時には、既に額を撃ち抜かれていた。一人だけではない。彼女は三発の銃弾を放ち、三人を殺傷していた。

身を翻し小倉屋のなかに逃げ込んだ。汗がどつと噴出した。喉が渴いている。が、そこで立ち止まってはられない。あそこには五人いた。三人撃った。残りは二人だが、追ってきている。邸内に足音が響いている。彼女は秘密の扉を開きなかに身を躍りこませた。一瞬の差で、壁の向こうの廊下を足音が通り過ぎて行った。

彼女は大きく肩で呼吸して、今改めて自分が人を殺した瞬間のことを思い返した。混乱した。冷静ではいられない。当然だ。自分は許されるのか。避けようのない行為だったのか。冷静に考える余裕はない。

暗闇のなかに人の気配がある。かすかにうめく声が聞こえた。

闇の中に目を凝らせば、小倉屋主、白石正一郎だった。床に倒れている。周囲の床をぬらしているものは彼の血だ。

「おじさん！！」千鶴の声に、白石は正気を取り戻した。

「なんと、千鶴か？」声に力ない。

「おじさん、大丈夫か？ 怪我をしているのか」

「善い。千鶴。善い」覚悟を決めた人間の声。

「好きなだけ、武器を持って行くが良い。人消しの弾もできてある。

・・沢山ある。千鶴、生き・・延びよ」そう言ってことくれた。

畜生お。彼女の心に浮かんではその言葉だけ。畜生お、畜生お、繰り返しながら手当たりしだいに武器を身につける。サスペンダー式のホルスターで腹に二丁拳銃を差した。腰に二丁。背囊に人消しの弾を押し込み、空いたスペースに入るだけ拳銃の弾を詰めこんだ。壁に、頭巾までついた黒い鎖帷子があった。これだ。陣笠を放り、自分用にあつらえた鎖帷子をはおった。人消しを肩にぶら下げ、両手にも拳銃を持った。

その眸子炯炯と闇にひかった。迷いは消えた。

壁に肩を当てる。耳を澄ます。先刻の足音が聞こえる。再び前を

通りすぎる。壁を蹴破るようにして廊下へ躍り出た。ふりかえる幕兵二人。タンツ、タンツ、短い銃声。二発で倒した。硝煙がゆらいでいる。銃口はもう、震えていない。暗闇のなかに、彼女の目だけがらんらんと光っていた。

彼女は耳を澄ませる。市街地の彼方此方から銃声が聞こえてくる。月が出ている、夜目が利く。ただ、その条件は敵も同じだ。

ダンツと身を翻すと屋敷を飛び出した。出くわした幕兵ひとりを撃ち殺した。方向も定めず駆けた。

銃弾が頬を掠めた。闇の向こうからライフルで狙う者がある。彼女は民家の塀を乗り越え庭先へ飛び降りた。駆ける。再び塀に登る。すると、隣家の庭先に幕兵が五人ほどこいた。

気付いていない。銃口を向けた。一瞬だった。五人撃ち殺した。が、路側に兵がいた。敵の銃弾が足を掠めた。どさり、塀の上から路上へ落ちた。拳銃を取り落とした。敵の銃口がこちらを向いている。人消しを撃った。その銃弾は、敵の上半身を蜂の巣にしてぶっ飛ばした。はじめて撃った銃の破壊力に驚いた。それは敵も同様だった。兵が怯んだ隙にすぐさま銃身側面下部のこうかん（ボルトハンドル）を引いた。空の葉莢が飛び出す。弾を込め再び撃つ。今度は、二人まとめて吹き飛ばした。

しかし、それまでだった。ライフルを持った敵が闇の中からぞろぞろと現れ、その銃口は全て自分に向けられている。畜生。腰のホルスターに手をのばした時。

赤い筏

しかし、それまでだった。ライフルを持った敵が闇の中からぞろぞろと現れ、その銃口は全て自分に向けられている。畜生。腰のホルスターに手をのばした時。

凄まじいばかりの銃声が響き渡り、兵の頭を次々撃ち抜いた。何者かが襲い掛かってきた。

襲撃者は一瞬で駆け寄り距離を詰め、肉弾戦となった。目の前で激しい殺し合いが始まった。

長い鉄の棒をふりまわす者がいる。棒の先は尖っていて幕兵を串刺しにする。奇兵の使う牙を飛ばす者がいる。しかし彼らは奇兵隊ではない。それだけじゃあない。鬼のような男がいる。狐に似た目をつりあげ、口にゆがんだ笑みを浮かべ、敵に体当たりするや、その手の刃で腹搔つ捌く。髪をわしづかみ喉を搔き切り放り出すと、また体当たりをかまし腹を突き刺し心臓まで肋骨をへし折りながら搔きあげる、内臓を掴み出しとなりの敵の顔めがけて投げつけ、怯んだその顔を肉片ごと薙ぐ。

男達はたった五人だ。その人数で、続々集まる幕兵と、互角に渡り合っている。

鬼のような男が、その殺戮の手を休め、彼女のそばに来た。

「今のは、狗の銃『人消し』だな。お前は狗の子か？　ちよつと待て。娘子ではないか。陸！！　こつちへ来い」呼ばれてきたのはまだ少年だ。彼女と違わない歳と思われた。きれいな顔に驚いた。

「この娘子を護れ。いいかつー！」

「任せろ。東夷」そう言う少年は銃を抜き、千鶴の前に仁王立ちした。

東夷と呼ばれた男は、殺戮の輪の中へ駆け戻っていった。抜き身の白刃片手に。

自然、目で追う千鶴。男は、敵のふりおろす刃を刀ではじき飛ば

し、左足で中断蹴り、その勢いのまま高く跳び、右膝を敵顔面にぶち込んだ。すたん、と着地すると、よろけた敵を撫で斬った。そのまま体を回転させ、刃をふりまわした。その刃の先が敵の顔面をスパツと斬った。刀を取り落とし顔を押さえたその敵の顔面を、殴り飛ばした。情け容赦ない修羅のごとき戦いぶりだが、なぜか自分と同じ匂いを感じた。自分と同じ怨念にとらわれている……。なにやら安堵して眠くなった。理由はわからないが、耐え難い睡魔に襲われた。陸という少年の背中を見ながら、自分の意識が遠のいていく様を、不思議に思いながら、眠りのなかへ沈んでいった。

馬の背に揺られて目覚めた。まだ意識は朦朧としている。足に止血の布が巻かれている。誰か、逞しい男の背に紐で体を結わえられている。どこかの山中だが、風に乗る潮の香りがする。海が近いのか。「どこへ……？」小さく呟いた。ふりかえり、先刻とは別人のような顔でその男は言った。

「気づいたか？ 俺の船へ行く。この岬の先に俺の船がある」船？……船ってなんだ？ そう思いながら再び眠った。

「お帰りなさいましつ、御頭っ！」

浅い眠りの中、威勢のいい水夫の声で、船に着いたと知った。

「機関に火を入れる、すぐに出航する」

「御頭、それは？」

「怪我をしておる。軍医を呼べ、すぐに手当てをしてやれ」聞きながら、再び眠った。

狭い入り江の暗がりの中、身を潜めるように隠されていた、東夷の軍艦の機関に火が入り、甲板に一齐に灯がともされ、その姿が闇に浮かび上がった。造十余年になるが、乗員の愛情が込められた船内は何処も彼処も磨き上げられ、錆ひとつなく黒光りしている。大きな外輪が力強く水を掻き、船は出航した。

豊永志功の策略は、絵に描いたように思い通りの結果となった。

芸州口を焼き払い奇兵を集結させる。手薄となった下関に小栗を進軍させる。その絵の通り、芸州口は焼け野原だ。下関と彦島は幕軍の手に落ちた。奇兵は山口の政治堂近辺に集結している。萩にも、下関にも近寄れない。長州全土に、逃げのびた避難民があふれている。

長州滅亡への序章だ。ほくそ笑む。即刻、山口総攻撃の許可を幕府に求めた。

焼跡そして記憶の欠片（前書き）

前回までのあらすじ。

豊永志功は芸州口の難民キャンプを攻撃させ、その隙について小栗に下関を落とさせた。

下関の市街戦に巻き込まれ傷を負った千鶴は、東夷ら赤い筏に助けられ軍艦オテント丸で手当てをうけた。

焼跡そして記憶の欠片

襲撃から一夜明けた芸州口である。見渡す限りの焼け野原に、一人立つ男があった。件の旅の男である。既に一人の兵の姿もない。幕軍は芸州口を焼き払うと奇兵隊到着より先に撤退し、奇兵隊は欺かれたと知り踵をかえした。ここにあるのは、かつて人々が住まっていた街の跡と、焦土と、焼け焦げた人々の遺体である。

銃をもった遺体は必死で応戦してくれた広島藩士のものだろうか。焼け焦げて見分けがつかぬが。大人ばかりではない、小さな子供の遺体もある。男は涙をうかべながら、丸まって焼け焦げているその子の頭を撫でた。

いつたい、後、どれだけの涙流せば、この悲しみの果ては見えてくるのか……。

男は懷から銃を出した。その引き金には、紙のこよりが巻いてある。もう、殺生はせぬ、と誓った。そのこよりをちぎり破り捨てた。東を睨む。大軍、まだ遠くへは行っていない筈だ。広島藩内にあるだろう。

千鶴は夢を見ていた。なにか、とても大事なことを自分が忘れている。夢のなか、常にその意識があった。それは、起きていても時折感じる。そんな時、彼女は何故か知らぬ睡魔に襲われるのだった。そして、決まって見る夢は兵士に追われている夢。彼女一人を沢山の兵隊が追いかけてくる。彼女は武器を何一つ持っていない。逃げるしかできない。悪夢だ。追い詰められ引き倒されて、いつも夢は覚める。だが、今日の夢は若干違った。逃げているのは彼女ではない。違う。彼女はそれを見ている。身動きできず。声が、聞こえた。「いいかい。よく、お聞き」……これは誰の声……？ 知らない……、違う。記憶の奥底に眠っていた人の声。

「おっ父もおっ母も殺された。もう、ふたりきりなんだ」

違う。わたしの父は小一郎で、母は香枝だ。ふたりともまだ生きている。

「いいかい。反対の方へ……逃げるんだよ……」誰？ 嫌だ。反対の方へ行ったら、嫌だ。一緒に……、目が覚めた。大粒の涙が頬を伝っていた。記憶が戻ったわけではない。ただ、記憶の断片の欠片が涙となって次々あふれた。

彼女は起きあがり涙をふいた。周囲を見回す。船室のようだ。見なれぬ水夫の服を着せられている。白いセーラー服に白いズボン。

わたしの銃は？ それは探すまでもなく枕もとにあった。六丁の拳銃と人消し、弾の入った背囊。そして壁にかけられた鎖帷子。

船室の扉が、そっと少しだけ開き、少年の顔が覗いた。陸というあの少年だ。目があうと、パタンと顔を引っ込めた。そして、どたばたと駆け去る足音。

足音は再びあわただしく戻ってきて、三人の男が船室に現れた。

一人は今の少年。もう一人は、あの狐目の男。最後の一人は洋装で、ワイシャツとズボン姿、異国の血が混じっているのだろうか、整った顔立ちだった。

「医者桜井頌江だ」そう言うと微笑みかけた。戸惑いながら、千鶴も笑みを返した。

「傷があるので席を外してくれ」後ろの二人に言った。狐目の男が、ふむとうなずき、千鶴に言った。

「ここは軍艦オテント丸。俺は高杉東夷。浪士隊、赤い筏の首領だ」

「あんた達が？ 赤い筏」相手の言葉に驚いた。噂に聞いた赤い筏が目の前にいる。

陸が横から口をはさむ。

「俺の名前は東雲陸。東雲と書いてしのめと読むんだ」

その陸を制して桜井が言った。

「いいから、早く出て行くんだ。相手は病人だ。早くしろ」言われて二人は退散した。どうやら軍医には逆らえない様子。

さて、その桜井頌江、足の包帯巻き替えながら、怪我人にはやさ

しく言った。

「良好だ。化膿もしてない。縫うほどの怪我でもない。運がよかったな」

「かすり傷か」

「そうだ。だが、今朝まで熱が出ていた。しばらくは安静にするんだ」この程度の傷で発熱するとは解せない。桜井はそれを心の病のせいと考えた。

「分かった」おとなしく従う千鶴を見て満足げな桜井。

「気に入った。だいたい、ここの連中ときたら、死人になる一歩手前のような怪我をして帰ってくる。そうなる前に退けと言うのに。そういうやつらには手荒い治療をしてやる」そう言つて、針と糸で裁縫する真似をした。思わず笑みがこぼれた。それで、ここの男達は軍医を恐れているのか。少しわかった気がした。

桜井が扉をたたいた。

「おい、もう入ってきてもいいぞ」

ボタンと扉が開いて、笑顔の陸と、仏頂面の東夷が入ってきた。なんだ、まだそこにいたのか。と、千鶴は思った。

桜井は、彼女のための食事を用意するよう陸に言いつけ、少し話がある、と東夷を連れ出した。

「あの子だが、心に病がある。何かわからぬが。意識を失ったのは傷のせいではない。心が無意識に防御している。そして眠った。三日間も」甲板に出て、周囲に人がいないことを見て取ると、桜井はそう言った。

「心の病……？」東夷には理解しがたいようだ。だが、お前と同じだ、と言われた。

「眸子の奥に、お前と同じ色が見える」お前と同じ怨念の火だ。

「それが娘だてらに銃を持ってあそこにいた理由か」

「推測に過ぎないが」海風が桜井の髪をなびかせている。

あの娘は狗の子だ。狗の銃を持っていた。東夷が呟いた。

「なにかしら、深い因縁あつてのことか」そう言いながらも無関心を装った。

詮索する必要はない。俺には関係ねえ娘の話だ。とは言え、思いはせずにいらなかった。人は、あまりに大きな心の傷を負うと、まったく別の人格をつくりあげ本当の自分を心の奥底に隠してしまうこともあると聞いた。そんな類の話だろう。根っこにあるのが、俺と同じモノならば、容易に推測できる。俺は……逆だ。すべてをのみこんだ。それ、が、俺のすべてとなつた。

小一郎

広島藩領内。街道を幕軍が引き揚げてゆく。その街道脇には広島藩士がずらりと並び、これ以上の、自国領土内での暴挙を許すまいと目を光らせている。そんな広島藩士たちの表情を嘲笑いながら不遜な態度で街道をゆく幕軍。

その軍列の最後尾めがけ、男が馬をとばしてきた。早駆けの蹄の音に彼らがふりかえった時、飛んできた三日月形の牙に額を割られた。人々があつけにとられた次の瞬間には、男は隊列只中に深々と斬りこみ、十数名の幕兵の額を撃ちぬいた。信じがたい突然の襲撃に兵らは慌てふためきライフルに弾を込めた。馬上の男を狙う。その間にも、次々兵を殺めてゆく二丁拳銃の男。まさに鬼神のごとく、阿修羅のごとく、兵只中の馬上にあり、飛んでくる弾ものともせず、引き金を引き続ける男。

しかし、そこまでであった。一発の銃弾が男の肩を撃ちぬき、一瞬男の動きが止まった。次の瞬間には無数の弾を喰らい、男は馬から滑り落ちた。

「かあっ！っ！」奇声を発したのは広島藩士だ。あの男を救え。口々に言々と兵を掻き分け押しのけ、男に駆け寄り刃から護った。現場は騒然となった。男を助け連れ去ろうとする広島藩士達と、どめを刺さんとする幕兵との間で小競り合いがおき。しかし、それ以上のことはならず、だが、一触即発の空気を色濃くしながら、幕府軍は広島藩内を抜けていった。

男は広島藩士の屋敷に匿われた。

彼は夢を見ていた。不思議な夢だった。

小さな川のほとりで、香枝と暮らしている。不思議なことに二人は、十年経っているにもかかわらず、出会った時の、昔のままの顔だった。それは夢と思えぬほど鮮烈に。彼は何も言えない。彼女を

見つめる。その彼に香枝が微笑み何か言った。小一郎様、……。

「まったく、無茶をなさるものだ」夢から覚めた。

「何故、あんなことをされた？」

意識を取り戻した男に、広島藩士浜井佑介は言った。浜井の屋敷である。

彼はそれには答えず、無言のままだった。長い沈黙の後、芸州口を見た、とそれだけ言った。

「それで怒りにまかせてあのような真似をなされたか？ 御主は運が良かった故、致命傷は受けておらぬが、当り所がほんのわずか違えば、命はなかったぞ。よいか、悔しき思いは我らも同じじゃ。堪えるのも男ぞ。御主に家族は居らぬのか？」人の良い広島藩士は、男を思いやりあれこれ聞いてくる。

「居らぬ……」そう言つてしばらく黙り込んだ後、ずっと、女を捜していた。と呟くように言った。……生き別れ、この十年間、

「再び会つと誓った。あの芸州口に居たのやも知れぬ」

男が語ったのはそれだけだった。

浜井も黙り込んだ。

「そうだ、面白い男に会わせてやろう。うちに泊まっている。外国人だ。芸州口の写真を撮るためこの広島に来ている。もうすぐ帰ってくるはずだ」人のいい浜井は努めて明るく語った。

そこへ、待つほどもなく噂の主が帰ってきた。

一目みるなり、小一郎にあの日の記憶が蘇った。たった一度すれ違っただけの男に過ぎない。だが、あの日下関で、アーネスト等と同行していた写真家に違いない。見憶えていたわけではない、が、確かだ。

「写真があるはずじゃ、」小一郎は我を忘れ叫ぶ。写真を撮ったであろう。下関で、幼い少女の、御主の本国の新聞に載せたはずじゃ。憶えておられぬか？ 頼む、思い出してくれ。その時、一緒に居た者達の写真も撮ったはずじゃ。若い娘が居たはず。憶えておられぬか？

その剣幕に、ベ아트という写真家は少々吃驚したようである。

憶えては居らぬが、……勿論、その少女の写真は覚えている。何しろ本国の新聞に載せたのだから。だが、その時一緒に撮った写真となるとそこまでは憶えていない。

その返答にあきらかに落胆した小一郎に、ベア트는こう言った。

「なにも写真がないと言ったわけではない。撮った写真は全て保管してある。少々時間はかかるが、あなたの探し物は見つかるだろう」

ペアトの写真

彼女が寝ている船室の扉を、ギイときしませながら少し開き、入ってきた者がある。猫だ。太っていなければただの三毛猫だが、米俵に足が生えたような巨漢だった。

見ていると猫はのっそりと近づき、巨体を伸ばしベッドの上に上ってきた。そこで立ち止まり、彼女の顔を見てニヤーと鳴いた。これほど太った猫を見たのは初めてだった。思わず笑みが出て、

「お前も『赤い筏』なのか？」猫に聞いた。さしのばした千鶴の手をぺろりと舐めて、その足元で丸くなった。

ここはどういう所だ？ 天井を見ながら考えた。猫まで変わっている。笑みがこぼれた。東夷も、桜井も、陸も、一風変わった人間ばかりだ。あの、尖った棒使いや、牙使いも、まだ見ぬが変わっているに違いない。

何故とは言えぬが居心地がいい。

生きてきてはじめて、自分の居場所を見つけた気分になった。

「あんなかわいい娘が、どうして拳銃なんかもって戦ってたんだろ？」

興奮気味に陸が言う。オテント丸の甲板だ。そのセリフを聞いた天谷と新居浜は、目を丸くした。

「かわいい！？ 本気で言うところか！？」あの、散切り頭で銃ふりまわす色気も何もない娘子が「天谷に頭から否定され、顔を真っ赤にして言い返そうとする陸。

「よし、よし。お前は女子を知らんけん。しょうがなか。今度、好いところへ連れて行ってやろう。さすれば」なだめる新居浜に、
「ヘンだっ。いらねえやい！！」口を尖らせた。

そこへ、のっそりと悪党面を出したのは外松だ。猫を捜している。
「誰か、俺のミシマを見かけなかったか？」ミシマというのがその

名だ。

陸が知っていた。だが、黙っているべきだった。余計仲間に冷やかされる結果となった。

「ミシマなら、狗の娘子の部屋だ。さっきのぞいたら一緒にぐっすり寝てた」

おどけて驚いてみせる一同。

「いくら惚れたとはいえ、娘子の寝ているところを覗くとは、何たる助平な」と天谷。

「うむ。男子としては許せぬふるまいじゃな」したり顔で言う新居浜。に、真っ赤な顔で抗議する陸。

「だって、病人じゃないか！ 心配して様子を見に行ったんだ。何が悪い？」

「医者に任せておけ」ニヤニヤしながら一同冷たく言い放った。

程なくベアトは行李いっぱいの写真を持って戻ってきた。几帳面な性格らしく年代別、地域別にストックされてある。これなら手間なく目的の写真も見つかるのではないか。浜井と小一郎はそう思った。60年代長州と題された分厚い包みを開いた。連合艦隊の勝利を収めた記録写真、米兵達が長州の砲台の前で取った記念写真、破壊される前の萩の町並み、町民たちの暮らし、武家の衣装といった。外国人には興味深いであろう、日本の風習の数々。それから、一転して、見るも無残な虐殺の現場写真が大量に出てきた。腐乱して膨れ上がった真っ黒な遺体、田から掘り起こされた人骨の山、等々……。

小一郎は思わず目をそむける。浜井が一枚の写真を見つけた。幼い少女が写っている。

「小一郎とやら、これは？」ベアトが、それだ。新聞に載ったものだ。と言った。

「千鶴だ。私の連れだ」小一郎が呟く。一同は、その写真の入って

いたファイルを丹念に見ていく。

見つけた。長い年月の向こうのわずかばかりの平穏な日の記憶が、その一枚の写真の中にあつた。千鶴を真ん中に、伊予乃介が良太を抱いて、そして香枝が微笑んでいる。写真の中の伊予乃介は緊張を隠せぬ面持ちで、小一郎は思わず笑みがこぼれる。そして香枝、若く美しいままの姿で写真の中から微笑みかけている。魂を取られるなんて田舎者の言うことだわ、と、あの時生意気を言っていた。写真のその顔を幾度も指で撫でながら、小一郎は不覚にも涙を止めることが出来なかった。

「貰つてもよいか？」鼻をすすりながら言う彼に、ベ아트は無言で頷いた。

洋上・オテント丸

二日も寝ていると、いい加減に飽いた。船室を出てみようと思った。もう、歩いたっていいだろう。

ベッドを降りて自分の足で立つてみた。引きつったような感じがあるが、痛みはない。全然平気だ。

彼女はそつと扉を開けると外へ出た。階段がある。あの階段をのぼればデッキに出られるのだろう。

ぱあつと眩い光に目がくらんだ。真つ青な空。白い雲。降り注ぐ陽光が彼女を迎えた。

おずおずと甲板に姿を現した千鶴を最初に見つけたのは陸だった。「やあ、もう起きてても大丈夫なんだ！」満面の笑みで声をかける。戸惑いながら笑みを返す。医者への許可はもらっていない。

「来いよ。案内してやる」並んで歩き始めた。あそこがブリッジで、ここがメインデッキだ。で、これが世界最強の大砲アームストロング砲だ、自慢げに話す陸の言葉を上の空で聞いた。ちよつと外の空気が吸いたい、と思ったただけだ。こんなに堂々と散歩するつもりはなかった。水夫たちが、物珍しげに彼女を見ている。軍医に見つかりはしないかとひやひやした。が、それは杞憂だったようだ。前から歩いてきたのは桜井だ。

「どうだ。もう歩けるか。散歩するのは悪くないがほどほどにしておけ」その声をかけて立ち去った。

何だ。心配するほどのことはなかったな、と見送った。

前から三人男が歩いてきた。一人はあの棒の男。一人は牙使い。一人は年配の男。陸が名前を覚えてくれた。

「背の高いのが新居浜で、悪党面が外松で、爺が天谷だ」勿論、小声でだ。

その天谷が言った。

「陸、機関室に行くぞ。なにやら調子が悪いらしい」

「へえ、どうせまた、同じところじゃないの」と言いつつ、陸は千鶴に手をふつて、天谷、外松とともに船内へ降りていった。

「あんたは行かないのか？」千鶴は一人残った新居浜に話しかけた。「俺は最近仲間入りしたばかりだ。船のことはようわからん」困った風に真顔で答えた。

「ふーん、そうなんだ」そこで途切れて会話が続かない。じっと二人で海を見ていた。

数分後、思いついたように新居浜が言った。

「お前、名前は？」

そういえば言っていなかった。聞かれてもなかったし。

「千鶴だ」

「ちづ？」

「そうだ」

幕府は山口攻撃を許可しなかった。それは先日の芸州口攻撃での諸藩ならびに英国の抗議に恐れをなした故である。また、水戸藩に不穏な動きあるという。藩主急逝に穏やかならぬ空気が漂っているらしい。そんなことはまずありえないとはいえ、今日まで水戸藩には弾圧を加えてきた。いらぬ反感は買わぬほうが良い。

派兵はしない。それが結論だった。

その報を受けた豊永志功、目を白黒させて憤った。自分の策を否定された。こと、己が自尊心を傷つけるものだけは徹底的に許さない男だ。実権を握っている今、尊大な思考を身の程知らずに持っているのも不思議ではない。部下は影で螭螂殿と呼んでいる。志功の斜視を皮肉ってだ。その斜視が冷徹に光った。ふん、まだ策はある……。どこを見ているかわからない目で居並ぶ部下を見た。こいつらは使えない。

二日もたつ頃には、船の雰囲気にもすっかりなじんだ。水夫たちも、この珍客を歓迎している風である。『赤い筏』が五人きりだと

知ったときは驚いたが、あの時の戦いぶりを見れば納得できないことはない。それに、噂というものは、必ず誇張されるもので、彼らの噂も例にもれず、たった二人の海賊、とか、たった三人の男が、とか吹聴されていた。それに比べれば、五人というのは妥当な数である。が、海賊行為を（しかも幕府相手に）たったそれだけの人数で行ってきたのは快挙である。褒めてはいけない。無謀、無茶苦茶である。何故、そんな経緯となったのか、聞くまでもない。頭領を見れば一目瞭然である。

この男を理解できる人間は少ない。しかも、彼自身人間の好き嫌いが激しい。自然、集まる人間は少ない。

今、オテント丸は、瀬戸内海の無人島の入り江に投錨している。彼らの備蓄基地だ。全員総出で、小船を使い石炭を積み込んでいる。彼女はその様子を甲板から眺めていた。背後からそつと横に並んだ男がいる。東夷だ。

気配に気づいて目をやったが、話しかけてくる様子もないので、再び海上に目を移した。

しばらくしてから、東夷は言った。

「凄い腕だな。お前」銃のことだ。

「見ていたのか」聞き返した。

「ああ。あの時、お前は塀の上において、庭先に五発撃った。庭先からは一発の反撃もなかった。庭先にいたのは五人か？」

「そうだ」

「五発で全員をしとめている。反撃の暇も与えず」

千鶴はうつむきがちに回顧の目をあの日に向けた。

「あの日、わたしは十四人殺した……。初めて人殺しになった」初めて人を撃った。相手の顔も憶えている。何人殺めたかも憶えている。忘れられるものではない。

「いずれ、何人殺したか憶えていられなくなる。相手の顔も忘れてしまつ」慣れる、ということではない。麻痺する、と言ったほうが近いかもしれない。だが、彼は違う。正直には言わなかったが。彼

は幕兵殺しを楽しんでいる。幕兵を一人殺すごとに、自身を絡め取った鎖を一本断ち切るごとく感じている。俺は人間ではない。鬼の子だ。

「何故、下関にいた」あの総攻撃の日に。

「白石のおじさんに、銃の修理と弾を作ってもらうよう頼んでいた。父の遺した銃で少し変わっている。それを受け取りに行った」

「狗の銃か。やはりお前は狗の子なのだな」

「お父はどこにいるのか知らない。でも、きっと生きている。いつか帰ってくる。それまでわたしが家族を護らないといけない」

東夷は頭の中で逆算した。この少女の年齢とあの狗の片割れの処刑の日、つまり連合諸藩の下関奪還の日、それを計算すれば、この娘がおそらくあの時の混乱の中で父親と生き別れただろうことが推測できる。彼女が、父が生きているという根拠も推測できる。あの戦いの後、狗の死体は見つからなかった。二人ともだ。

「家族というのは？」

「母と弟だ。芸州口に住んでいる」

東夷の顔色が変わった。その眼見て不思議そうな顔を見せる少女。「知らないのか？」なにをだ。怪訝な顔をする千鶴。

東夷は目をそらすと、芸州口攻撃のことを口早に語った。千鶴の顔色が蒼白となった。ついで憤り真っ赤になった。

東夷は大喝した。海上の小船に向かって吼えた。

「急げっ！！ 出航だっ！！」

芸州口へ行つてやる。だが、それで何ができる。もう、手遅れだ。

江戸喉元に突きつける匕首となる

所変わって水戸である。

世子が次々と流行り病で急死した。困りはてた水戸藩参政らが（否、真実は逆である。対外的には困り果てた振りをしつつ、その実、今ぞ時は来たれりと）担ぎ出した人物は、前々水戸藩主にして、安政の大獄にて永蟄居命ぜられた徳川斉昭の五男の非嫡子、匡家であった。血は一橋慶喜の甥に当たる。長男、次男の世子、並み居る正当後継者をとばして担ぎ出された訳だが、異論を唱えるものはいない。

この人物、温厚にして才あり、文武に優れた者と評判であったが、その実、謎に包まれていた。この十年、国許にありながらその姿を殆ど人前に現さない。藩政の表舞台とは程遠いところで静かに暮らしていた。本来ならば、藩主の座など回ってこない巡り合わせであった。齢36歳。まだ若い。

その匡家のもとに迎えが来た。

「殿、お迎えにあがりました」そう言つて平伏する家臣の顔を見て、匡家は声をかける。

「ご苦労である。……そちの名は？」

「はっ、葦辺平十郎に御座います」かつて茅野幸吉と名乗っていた者の弟である。

匡家は、感慨深げにこう言つた。

「やはりか、……兄によく似ておる」そう言われて、平十郎、涙をこぼしながら、

「恐れながらこの平十郎、この日が来るのを待ちわびておりました。今日よりこの平十郎、兄になり代わり命を懸けて殿を御護り申します」そう言つた。

「うむ、……では参ろうか」

「はっ、城では参政始め重役家臣の各々方が殿の藩論表明をお待ち

に御座います。殿、今ぞ時、皆の心は一つに御座います。ご明断を臆することなく申し述べてくだされば、我ら全ての水戸藩士、殿のため、命を捨てる所存にあります」

「余とともに、と言い換えよ」そう言つて微笑むと、匡家は立ち上がり、手にあつた粗末な木の口ザリオを着物の襟のしたにそつとかけた。

水戸城閣議の間、ずらり居並び平伏する家臣を前に匡家は座した。「皆の者、ご苦勞である」凜とした声が響き渡る。しわぶきひとつない。静まり返っている。

「この匡家の不明を許して欲しい。今日、この日をもって水戸藩の藩論は武力討幕である。皆、よくぞ今日まで度重なる不遇を耐えてきてくれた。もはや我が水戸は徳川親藩にあらず。我が水戸は、連合諸藩と共に徳川幕府を倒す。江戸の喉元に突きつける匕首となる。異存有りや」平伏している彼ら家臣の畳の上に無数の涙が零れ落ち、彼ら口々に「有りませぬ」と答える。

「まず、薩摩は島津久光、西郷吉之助、大久保一蔵、土佐藩は山内容堂、後藤象二郎、長州藩は毛利敬親、木戸準一郎、これら諸氏に会いたい。早速手配せよ」

「次に、軍制改革を急務とする。正規の藩兵の七割を出兵、遠征し攻撃の為の部隊とする。国を護る為の兵力は徴兵をもって、農・町民にあたらせよ。四民を撤廃し、帯刀を許しライフルを与えよ。己が町村を護らせよ。徴兵にあたっては、16歳以上、40歳未満の男子を対象とし、鍛錬のこと、農繁期の免除のこと、早速法令化せよ」

「英国提督及び通士のアーネスト氏、そして武器商人のグラバー氏に合う。手配せよ。ライフル、拳銃、アームストロング砲、軍艦、金に糸目をつけず買い集めよ」

「以上、全て時が来るまで口外することなく迅速に動け」

「討幕の暁にはこの匡家は引退し水戸藩はいったん解体するを旨と

する。藩主は入れ札制により広く四民から選ばれ、議會を設置し参政にあたる議員も入れ札制により選ばれるを旨とする。」

「異存有りや？」

藩士は皆、涙でむせび返答できない。

安政の大獄から始まり、井伊直弼の暗殺後も、水戸藩に対する弾圧はとても親藩とは思えない仕打ちが続いていた。十余年にわたり藩士らの心は討幕を想い夢描き、とうとう、それを成し得る藩主に恵まれたのである。居合わせた水戸藩士の心は一つであつた。

「我ら皆、殿にめぐり合えたこと、嬉しく思います……」一人が声を絞り出すように言った。

長州殲滅の謀

夜半に志功は馬上の人となった。ひとりきりである。肝の細い男である。普通ならお供を何人も連れて行く。この行動はよっぽどのことである。向かった先は古ぼけた大きな寺。寺には百人以上の荒くれどもが酒をかつくらって眠っていた。

志功は金切り声を張り上げて、叱責した。貴様らに飯と酒をくれてやったのは今日の日のためじゃ。もぞもぞと起き出す荒くれどもいずれも素性の知れぬ者ばかり。凶状持ちや卑しい身分の者も多い。「二日後にライフルが届く。刀もじゃ。出撃せい」

「誰と戦うんじゃ」要領を得ない様子で一人が聞いた。

「狩れ。難民どもを殺しまくれ」現在、長州全土に、下関から芸州口から逃れた難民があふれかえっている。ターゲットは彼らだ。一方的な虐殺となる。下手人は豊永もあずかり知らぬ、士分ではない何者か、謎の襲撃者達である。それを受けて、奇兵隊が出てきたら正規の幕府軍で叩ける。なし崩し的に山口に攻め込める。

志功は、こういったならず者どもを四百人以上集めていた。

彼は思う。彼以外は馬鹿者ばかりだ。現実の認識が甘すぎる。薩長土、この三藩がそろえば倒幕はなる。なしえる。そう、彼は考える。が、現在、十分な国力を維持し戦争可能な藩は、薩摩と土佐のみ。われらが、ここ長州に布陣して、人身を疲弊させ、戦力をそいでおるからこそ、幕府は安穩としていられるのじゃ。この作戦でも生ぬるい。長州国は、民といえども一人残らず抹殺してはじめて徳川幕府の安泰があるのだ。民といえども一人残らず。女も、子供も。

千鶴は腰に奇兵刀と二丁の拳銃、吊バンド式のホルスターで腹にも二丁拳銃を差した。水夫の服はもらっていく。鎖帷子をコートのようにはおり、肩に人消しをぶらさげ、背嚢を背負った。手に二丁の拳銃を持った。出立の準備はそれで十分だった。

西洋の紙巻煙草をくわえたまま、微笑を浮かべ桜井が言った。

「医者としては、まだまだ許せぬところだが……仕方あるまい。優等生の患者というのはなかなかないものだ」

すまない、頭を下げた。「東夷も陸も……ありがとう。世話になった」

陸がにこにこして言った。

「いいよ。またいつでも来いよ」

無言でうなずくとロープを伝い小船に乗り移った。ふりかえり見上げると、甲板には赤い筏の面々のみならず仲良くなった水夫たちの姿もたくさん見えた。手をふると、向き直った。行く手に見える岸の向こうに、焼き払われた芸州口がある。

さて、千鶴の姿が闇に消えると、東夷は仲間告げた。

「お前らにも一働きしてもらいたい」そう切り出すと、

「陸。お前は東国へ駆けてくれ。水戸の藩主が死んだらしい。次の藩主とその藩論を知りたい。お前が一番怪しまれにくい。頼むぞ。

それから、天谷の爺さんと外松と新居浜はここで降り、長州国内の情勢を調べてきてくれ。特に萩周辺と山口周辺を。奇兵隊の山県に会って今後の策があれば聞いて来い」

血色の大地

一晩中、焼け跡を探したが何一つ見つからなかった。千鶴は街道を西へ向かう。数里進めば、街道のあちこちに避難民と思われる人が多数いた。見知った顔がないか、捜してみるが知らない人ばかりである。その人々に聞いて回る。良太という十歳くらいの子を連れた香枝という人を知りませんか。返ってくる答えはどれも、知らない、ばかり。

千鶴は聞くことをあきらめ駆けた。襲撃はもう何日も前だ。香枝なら、こんなところでまだぐずぐずしていない筈。生きていれば、もっと先にいる。

畜生と思う。晴蔵の新しい小屋を香枝は知らない。もし知っていたらそこへ身を寄せるに違いない。千鶴は教えていなかったことを悔やんだ。母の、弟の身を案じて、物狂おしい想いで駆けた。

「お千鶴ちゃん!? お千鶴ちゃんじゃあないか!」声をかけられてふりかえれば隣家のおばさんだ。千鶴は良かったと言い、母と弟の行方を聞いた。が、相手は知らなかった。

「あの時は、なにしろ、いきなり大砲がずどん、ずどんだったからねえ。あたり一面土ぼこりで。悪いけど見ていないんだよ」そんなことより、相手は知り合いの娘が兵隊姿でいることに驚いていた。

千鶴は余計な詮索をされる前に、礼を言っ先を急いだ。

はおった鎖帷子にわっかが縫い付けてあるのに気づいた。いや、わっかではない。簡易式のホルスターだ。彼女は両手の拳銃をそこへ差した。両手が自由になって、はじめて一晩中拳銃握り締めていたことに気づいた。

街道の脇、いたる所に粗末な即席の天幕が張つてある。屋根代わりのその天幕の下で身を寄せ合っている人々。その一つ一つを覗いてまわった。が、どこにも母と弟の姿はない。

行く手に人だかりがあつた。近づいてみても、人垣が邪魔で何が

あるのかわからない。千鶴は人垣を掻き分け前に出てみた。

草原に、倒れている、沢山の遺体。見渡す限り、三十人以上の人間が、殺され、野ざらしにされていた。遺体はいずれも、これ以上ないほど残虐なやり方で辱められている。

いったい何が起こった！？

野盗だ。と話している人がいる。野盗？ いったい彼らから何を奪うというのだ。着の身着のまま逃れてきた人々から！

娘たちはさらわれたようだが、どうせ殺されておる。そういう声が聞こえた。散々、惨い目にあわさたあとに……。千鶴は唇をかんだ。顔を真つ赤に憤らせその場を離れた。記憶の奥底に疼くものがある。いつもなら、この感覚の後眠くなる。が、今日は違った。冴え渡っている。

盗賊の類では意味がない。これは計画的な何かの策略だ。

何者のなした業か。手を下した者は知らぬ。兵であろうが兵でなかろうが。が、このような非道な策略を命じる人間はひとりしか居らぬ。

急がなきゃ。母さんたちを早く捜しださないと。

十年前、長州を虐殺の地にしたあの男が、再び同じ下知をくだした。

十年前に逆戻りだ。十年前……。いったい何があった。彼女には、その時の記憶がない。今の出来事と、その失われた記憶が、密接につながっているような気がする。だが、何一つわからない。解けない。彼女は頭をふった。

年寄りの知恵を借りるか。事態は急を要する。何か良い策を与えてくれるやも知れぬ。

彼女は街道をそれ、山へ向かう小道を駆けた。

何が、起こっている

さて、時はそれより数日さかのぼる。

山中奥深く分け入った場所にある、人里離れた晴蔵の小屋を訪れるものがあつた。二人の侍。一人は旅姿の武将、今一人はその従者といったところである。出迎えた晴蔵は

「これは珍客中の珍客じゃ、死んだと思つとつた男が訪ねてくるとは」と、さしもの晴蔵も驚きを隠せない様子で招き入れた。男は自藩隠密を使い、この場所を捜しださせた。すでに、薩摩、土佐の要人と密会し同盟を結び今後の策を立ててある。残るは長州奇兵隊のみ。

武将姿の男は板の間に姿勢正しく座し、（その様子は晴蔵に昔を思い起こさせた）今一人の従者らしき者は奥に控えた。

「奇兵隊本隊と連絡が取りたい、急を要する。爺、できるか？」晴蔵はにやりと笑い、
「容易い」と答えた。

そこは無法地帯だつた。いたる所に人の死体がある。木の枝にぶら下がっている。首だけ突き刺されている。道端に無造作に転がされている。街道で見た虐殺はほんの一端に過ぎなかつた。道の両脇に百人以上の亡骸が横たわる道を、唇かみ締め駆けた。この中に、母と弟がいないことを祈りながら。

晴蔵の小屋へ駆け込んだときには、滝のように汗が流れ、体中から蒸気が立ち昇っていた。言葉を発せないくらい、口は酸素を求めあがいていたが、その口ねじ伏せるようにして言った。

「爺、何が起こっている！！」

晴蔵は泰然として客人を迎えた。

「これは凄い有様じゃな。まるで戦馬のようじゃ。どこから駆けてきた？」

千鶴は苦しい息の下で答えた。

「芸州口だ」そう言うと、柄杓で瓶の水を汲み、音をたてて飲んだ。「なんと。芸州口から走ってきたと言うか。無茶をする。馬でも死んでしまう距離じゃ」笑った。

水を飲みようやく息が戻った千鶴は、苛立ちながらはじめての質問を繰り返した。爺、何が起こっている。

「来る途中見た。街道でも見た。何十人も、何百人も人が殺されている。戦じゃない。何が起きているんだ」

晴蔵は大きくうなずきながら千鶴の言葉を聞いた。

「弱き男よ」ポツリとつぶやいた。「どこまでも弱い男じゃ」

「弱い男？」何のことだ。千鶴は聞き返した。

「弱き男が権力を握っておる。実力があつてその地位を得たのではない。策略と人を陥れることでその地位を得た。人と強く結ばれたことなどない。人に自分と同じ血が流れておることを知らぬ。自分以外の人間の命を軽んじておる。男は自分の力で世を生きたことがない。常に権威のかさの下で狡猾に振舞ってきた。それゆえ、男は自分を利口だと思っておる……」

「人を殺すことが利口か」

晴蔵はふかくうなずいた。

「自分は利口だから勝ち残り当然と思っておる。自分以外のおろかな人間は死するも自然の流れと思っておる」

「それが」言葉に詰まった。晴蔵はあとを受けて言った。

「然様、豊永志功じゃ」

許せないっ！！

「おつ母と良太を助けたい」わたしは何をすればいい。

「心配ない。香枝は頭のいい娘じゃ。きっと生き延びておる」慰めるように、励ますように、晴蔵は言った。

そうだ。おつ母なら、あんな状況を見れば、きっとどこかに身を隠している筈。

「世話になった、爺。また来る」早口で言うと、弾かれたように小

屋を飛び出した。あとに残された晴蔵は目を白黒させた。が、すぐに真顔に戻った。娘の身を案じて。

小屋を飛び出した千鶴は、またも凄まじい勢いで山を下った。晴蔵の昔の小屋へ行ってみるつもりだった。今は無人のその小屋に、母たちが身を寄せているかも知れない。そう思った。夜空を、雲が駆けるがごとく勢いで走り、嵐の近いことを知らせていた。

風向き

約束の岬に、期日より一日早く、陸は戻ってきた。オテント丸に元気よく手をふっていたが、ひろって見れば全身刀傷だらけだった。

「これはひどい」

「誰にやられた」

仲間の問いには答えず、陸は必死で、こんなのは大した怪我じゃない。へっちゃらだ。と、言い張った。

下手に巻かれた包帯を外し、傷の一つ一つを無言で確かめている桜井に、大したことないだろ？　こんなの放っておいたら直るよ、ね。同意を求めたが、

「馬鹿タレ。全部浅い傷だが、ここが八針、こことここが十二針、こっちは二十四針縫わんといかん」宣告され、顔色蒼然、しゅんとなった。

「陸、往生際が悪いぞ」

「さつさと覚悟して、縫ってもらえ」水夫たちに笑われた。

「それより、ことの次第を聞こう。何があつた？」東夷に問われ、水戸へは入れなかったと答えた。

「どの関所も兵隊が沢山いてほとんど人を通さないみたいだ。だから俺、山を抜けて先へ進んだんだけど、大きな道には騎馬止めの柵がこしらえてあつて、手前に深い溝が掘られていた。大きな街道全部そうだった。けど、そこで見つかつて逃げてきたんだ。あんまり人数が多かったんで、少し斬られちゃった」そう言つて屈託なく笑つた。

「騎馬止めの柵……？　深い溝？」

東夷は桜井と顔を見合わせた。

「どう使う？」お前なら……。

「溝の中に体を潜ませ、敵が来たらライフルで撃つ」そうとしか考えられない、といった顔の桜井。西洋の巻き煙草をふかしている。

だが、にわかには信じられない様子。確かに、

「戦の準備をしとるのか。水戸が」東夷の言うつおり、水戸が戦時体制に入った意味がわからない。いや、考えられる回答はひとつだけあるが、それは信じがたい事柄。

「ともかく陸の手当てを頼む。褒美に丁寧に縫ってやってくれ」そう桜井に言々と船首へ向かった。背後では、じたばたする陸を桜井と水夫たちが押さえつけて船室へ連れ込んでいる。

水戸が、戦を？ 誰と？

船首に立った。風向きが変わった気がした。何も見えないが。

山口政治堂

「我は東行殿が子息、高杉東夷の使いの者じゃ。奇兵隊総督山県殿に会いたい」

山口の政治堂を警備している奇兵をつかまえ、こう言ったのは天谷だ。ちゃんと、高杉晋作の子であることを強調している。こう言え、門前払いなどできぬ。いかな新兵でもその名を知らぬ者はない。長州を救った英雄だ。むげには扱えぬ。

思ったとおり、兵隊は、いったん彼らを迎賓の間に通し、そこに待たせ隊長に報告に行った。現れたのは益田何某という部隊長。申し訳ないが総督山県は萩最前線の洞窟の中にありここにはおられぬとの返答。

「では、案内頼めますかな」と天谷が言えば、おひとりだけなら、との返答。

その言葉を聞いて一様に外松の顔を見る天谷と新居浜。

何だ！ 俺か！ と腹で思った外松。確かに元が奇兵であるゆえ適任ではある。が、勝手に話を進めておいて尻を俺に持つてくるか、天谷、老獪であるぞ。が、不承不承こう言った。

「では、益田殿。よろしく頼み申す」

さて、外松を奇兵隊に預け、政治堂をあとにした天谷と新居浜。

「では、我々は萩でも見物に行くか」つまり、萩の軍備を調べに潜入するということだ。

「ああ」とどこ吹く風といった返答の新居浜。

政治堂周辺は避難民であふれている。大きな天幕を張った屋根の下で、炊き出しなど配られている。新居浜はそのなかのひとりの女を見とめていた。その視線に気づいた天谷。

「どうした。確かにいい女じゃが、どうせ人妻じゃ。やめておけ」

「そうじゃない」とは言いつつも、確信が持てず言い出せなかった。

確かずっと以前に見た張り紙、そのなかの人相書きによく似た女だ。狗の一味といって手配中であつた。

蘇生

晴蔵の昔の小屋は無人だった。どころか、もう何年も人の入った形跡がない。

違った……。千鶴は肩を落としたが、すぐさま唇かみ締めきびすを返した。

今来た山道をくだる。風が強い。木々がざわめいている。気づけば曇天重く夜空に立ち込めている。嵐になる。

ふと、見覚えのある山々の風景に足を止めた。見覚えがあっても不思議ではない。晴蔵の昔の小屋には何度も来たことがある。が、しかし、今彼女の足を止めさせたのはその頃の記憶ではない。心の奥底のもっと古い記憶が、鮮明に蘇ったのだ。

目の前に雑草に覆われた道がある。そうだ。雑草に覆われているけれど、これは道だ。小さな集落に通じている。何故、わたしは知っている？

彼女はその道の奥へ進み、やがて廃村に出た。朽ち果てた家々が並んでいる。集落の中心に小さな広場……。導かれるように、広場の真ん中にある墓標へと歩んでいった。何年も野ざらしになり、もう薄れ消えかけている墓標の文字を読む。

落雷。背後に落ちた。

瞬間。すべての記憶が蘇った。

単一だった彼女のなかに、色々な感情が入ってきた。盲た人の目が突然開いたように、鮮やかな色彩が流れ込んできた。鮮やかな心の色と、単一ではない複雑な感情。自分の内部で踊り狂うそれらの声を制御できなかった。

「あ……。あ……。」どんな感情も声にはならなかった。

大粒の雨が、ポツリポツリと降りはじめ、やがて叩きつけるような土砂降りとなった。言葉にならない声を発しながら、雨に打たれるにまかせ、じつとうずくまり動けなかった。蘇った記憶を細部に

渡るまでなぞっていった。

たづ……。

姉さん。

やだ。やだよ。反対のほうへ逃げないで……一緒に……。

ごめん……、ごめんよ。忘れてて……。

多津、許して……。

何も、できなかった……。助けてあげなかった……。

許して……。

墓標が語りかけてきた。千鶴はじつと耳をそばだてて聞いた。立ち上がった。

焦点がずれ、二重に見えていた世界が、いまやはっきりとひとつの心で見えた。

土砂降りの雨のなか、凜々しく立つ少女。もう、昔の彼女ではない。迷いも逡巡もあるひとりの少女だ。だが、その決意は固い。民を救う。ひとりでも多くの命を救う。姉の墓標と約束した。

「多津。助けてもらったこの命、決して無駄にしないから」

鎖帷子の頭巾をかぶった。踝を廻すと、ふりかえらず駆けた。

「凄い、土砂降りだな」外松が言った。

「ええ。ですがトンネルの中は快適ですよ」案内役の益田が言う。

さあ、ここです。と、山中の土手の藪をかき分けた先に穴があった。

「ここからお入りください」

一瞬、まじまじと益田の顔を見る外松。が、抗議すべきことはないと思い直し、その、ウサギの穴のような入り口へ身を滑り込ませた。

なるほど、狭いのは入り口だけで、中は立って歩けるくらいに掘りぬいてある。支柱もしっかり立ててあるから落盤の心配もなさそうだ。

そのトンネルの中を、ぐるぐるぐるぐる連れまわされ、右も左も

わからなくなつた頃に山形に会えた。

そこはドーム状の天井で、四方に通路が延びている部屋。松明をかざした横に、山県は座っていた。

「おう、お前は確か、隊を抜け海援隊に行つた奴だな。牙の腕が良かったから憶えておる」山県のほうから声をかけられた。

外松は礼を言い、今では赤い筏という浪士隊にいること語つた。山県は知っていた。

「東行殿の子息が頭であろう。幼名は東一じゃつたな。数度会つたことがある。で、今回は何用だ？」

「奇兵隊、今後の策をお聞かせ願いたい」

その問いに、山県は意味ありげな笑みを浮かべた。

「奇兵隊の策か？ それとも、連合諸藩のか？」

面食らつて言葉が出ない外松に山県は続けた。

「望むなら、お前らも雑ぜてやろうか」

「早速帰つて、海援隊にも教えてやるが良い」

荒れ野の戦い・其の一

明け方、長州は完全に暴風域に入った。強風に、木々が根元から揺らされている。空のなかを飛ばされた物が舞っている。

その荒れ野。そこには一万人近い人がいた。皆、粗末な天幕の下で身を寄せ合い、夜を明かした。もう、朝が近いがこの嵐ではどこへも行けない。嵐を避け、いずこかへ避難すべきなのであるが、どこへ避難するというのが。人々には行くあてがない。ここで、嵐を耐えしのぐしかないのだ。風雨激しく叩きつけ、粗末な天幕を旗のようになびかせていた。

千鶴は四百人以上の兵隊と出くわした。いや、兵隊ではない。皆バラバラの服装で隊列もだらしない。だが、全員ライフルやゲーベル銃を持っている。

こいつらは何者だ。茂みに身を潜めて千鶴は行軍をやり過ごした。心臓が高鳴った。勘が当たっていればこいつらが……。距離を取り炯眼鋭くあとをつけていった。

やがて、荒れ野が、流浪の民が、眼前に広がった。

兵隊たちは路の斜面を駆けくんだり、続々荒れ野へなだれ込んだ。土砂降る雨のなか、手当たり次第に、誰彼かまわず、人を斬り、銃で撃っていった。大人も子供も、目に入るものはみな……。

千鶴は大きく息をついた。兵は四百、民は一万。味方はいない、一人きりだ。拳銃が6丁、人消し一丁、弾が無数……。

その眸子炯炯。

駆けた。両足を車輪のごとく回転させて。足が地を踏んでいる感触がない。無我夢中だ。雨を吸った鎖帷子が重かった。転がりながら斜面をくだり、人々の悲鳴入り乱れる荒れ野に躍り込んだ。すぐさま立ち上がると、人を斬ろうとしていた兵を撃った。一人、二人、三人。目に付いた男はすべて撃った。背後からの奇襲攻撃に、気づ

いていない兵がほとんどだ。気づいているのはほんの数人。彼女の周囲の男もだけ。ライフルの銃口を向けた男を撃った。三人。刀をふりかぶって襲ってきた男の額を撃ち抜いた。

土砂降りの雨のなかを駆けた。背後から賊を次々撃ち殺しながら。最前列の賊を撃ち殺し、民を背後に向き直り、人消しを一発撃った。一人が蜂の巣になり吹っ飛んだ。何者の襲撃か知らしめた。瞬間、静まり返る戦場。だが、それはほんの一瞬。

「狗じゃ。狗の銃じゃ」「狗が出たっ」騒然となる賊ども。いつせいに彼女を狙う銃口。身を翻し岩陰に躍りこむ。すでに両手の拳銃は空だ。腰の拳銃と抜き替えた。

「貸して。おいら、弾込めてやるよ」

岩陰に転がり込んできたのは、良太と同じくらいの年恰好の少年だ。

「頼む」空の拳銃と弾の入った背嚢を渡した。

「任せて」少年は答えた。

岩陰から応戦した。銃口はすべてこっちを向いている。

が、その隙に周囲の大人たちが立ち上がった。鉈や手斧を手に取り、賊に斬りつけ組み敷いた。獲物のない大人たちは石を投げた。

投石に賊の勢いがそがれた。

「行こう」千鶴は岩陰を躍り出て、四方八方の敵を狙い撃った。少年が後からついてくる。拳銃が空になれば渡す。すばやく弾を込め返してくれる。息も合っている。

「名は？」問えば、

「亮太」との答え。千鶴は少し驚いて少年の顔を見る。

「弟と同じ名だ」微笑んだ。

「へえ、そうなんだ」少年も笑みを見せた。

向き直り引き金を引きながら思った。弟や母がこのなかにいるかも知れない。

絶対に殺させない。

人々は鉈や斧を手に襲い掛かるが、ライフルで撃ち殺される。そ

れでも、次々立ち向かう。投石が賊を阻む。てこずらせる。だが、それはこの周囲だけだ。すでに敵の大多数は深々と人々のなかへ斬りこんでいた。

畜生、千鶴はつぶやいた。

「付いて来て」少年に言っていると、大混乱の戦場の中を駆ける。賊、撃ち倒しながら。

曇天、重く、空低い場所にあり、大粒の雨を叩きつけ、地上を強風で覆っていた。

白い水夫の服の上に黒い鎖帷子をはおった少女が、嵐の子のごとく大地を駆け、人を襲う賊を撃ち殺していった。

荒れ野の戦い・其の二

「なんじゃ?? こりゃあ!?!」素つ頓狂な声を上げたのは天谷である。

「石合戦をしちよる・・・わけではなさそうじゃな。ライフルを持った奴が沢山いる」間延びした返事をしたのは新居浜だ。

「そうじゃあ!! えれえもんに出くわしたつ。お前の言うとおりこの嵐のなか出てきて正解じゃった」荒れ野を街道から見下ろす二人組み。説明するまでもない萩へ向かう途中の天谷と新居浜である。「おい、よく見る、あそこじゃ」新居浜の声に目を凝らしてみれば、「なんと! 狗の娘子ではないか」言うと同時に抜刀した天谷。新居浜も己が得物を握り締めた。両名、子供のようにはいでいるように見える。

「助太刀するぞ」そういつた時には斜面をくだり降りている。

「行かいでか」ずざざざ、斜面をくだり大混乱の荒れ野に踏み込んだ。

えい、や、それぞれの得物で賊打ち倒しながら駆けたが、思わぬ事態に難渋した。

「あいたたたた」

「まずいぞ。石を避けながら進め」雨のごとく降る投石に身をかためて進んだ。

「でだん、かなわん」賊と切り結び、また石を避け、斬り伏せた賊の身を盾に突き進み、二人は千鶴のもとへ参上した。

「赤い筏見参」賊突き殺して、新居浜麻毘。

馳せまわり、襲い来る敵軽くないしながら、天谷虎之助。

「倒幕過激派赤い筏、狗の娘に助太刀いたす」

吹きすさぶ嵐のなか、思いもかけぬ味方の名乗りあげに、思わず、「ありがたい」かすかに涙ぐむ千鶴。

さても、その二人、値すること兵百騎。

天谷の刀には反りがあまりない。直刀（無反り）である。短めで肉厚（重ね厚い）（東夷の刀はさらに短めで鎬高い片切刃造かたきりはづくりといったところ。彼の場合刀剣よりも喧嘩が主なためその選択が自然である）。天谷虎之助は歴戦の兵。泥にまみれて戦ってきた経験がある。日本刀がいかによく切れる刃物であるといっても、人間五人も斬れば、その油で自然切れ味は鈍る。結局、切れなくなれば突くしかない。突きが彼の剣術の基本だ。敵と切り結び、刃を合わせながら寸隙ぬって突き繰り出すには、少し短めの刃の方が良い。

その歴戦の勇者が馳せ回る。一人の敵と二太刀交えたかと思うと、次の瞬間には敵は倒れている。また駆けて、次の敵と太刀交えるが、あつというまに敵の体は崩折れる。魔法のようだ。

新居浜の得物も突きのみである。打ちかかる敵の刃を棒で払えば、敵は得物を取り落とす。次の瞬間には胸板貫かれ、尖った鉄の棒の餌食となる。

パンと敵の刃を棒で弾き飛ばすと、次々突き殺していく新居浜。ふん、と鼻をならし、懷から東夷にもらった拳銃取り出すとパンパンと敵を撃つ。当たってはいないが威嚇のつもりだろう。

その二人、まさに値百騎の兵。

加えて、一万の民衆の抵抗。旗色悪しと賊は退きはじめた。その時、一瞬だった。一角が崩れ落ちると蜘蛛の子を散らすようにきびす返して逃げはじめた。

「勝った………？」千鶴はにわかには信じられなかった。だが現に、逃げ惑う賊を鉈や斧を手にした群衆が追い回している。荒野にどよめきがひろがる。それは徐々に勝利の雄たけびへと変わった。その喊声、荒野を揺るがし嵐を突き破らんばかり。雨がやんでいる。

すでに賊の姿はない。すべて打ち倒されたか逃げ出した。荒野には鉈を手斧を奪った刀をふりあげ勇ましく叫ぶ人々。涙する女たち。唐突に、街道に、百名ほどの幕兵が現れた。隊列を組み。その長らしき者が、馬をおり、嵐のなか良く通る声で言った。

「ここにおる者ども、善良なる良民を殺害、または傷つけたるものとして、全員、捕縛連行することとする。これは、萩におわす征長総司令官豊永志功殿の下命にて、たむかう者はその場で手打ちにいたす」云々。

書状を読み上げる声はまだ続いていたが、千鶴らは信じられない面持ちで耳を疑った。良民・・・？ あの賊どもがか？ いや、納得できないことはない。筋が通る。それは、もうひとつの事実も指し示している。賊は豊永志功手の者だったのだ。故に、これだけ早く幕軍の捕り方がやってきた。

「首謀者はまず前へ出よ」街道上から大きな声で呼ぶ幕兵の長。

千鶴はそばの少年亮太から背囊を受け取った。が、すぐに奪い返された。

「前へ出るんだろ。だったら一緒に行くよ」意味ありげに笑った。

天谷、新居浜がかんらんかんらと笑いながら、

「首謀者ということであれば、是非にとお願いしたい」とあとに続いた。海が割れるように人々は道をつくった。そのなかを進んでゆく、四人。中心に泥だらけの水夫服のうえに鎖帷子をはおった少女。その後ろに少年。両脇に壮年の男と長身の男。街道のうえへあがった。

風がやんだ。ぱつと陽光がさし、青空が頭上に広がった。台風の目に入ったのだ。

「貴様が首謀者か？」

現れた少女に多少面食らいながらも、隊の長は言った。

無言でうなづく千鶴。

「ひっ捕らえい」命を受け彼女の体を捕らえようと、両脇から兵が来る。すばやく腰の拳銃を抜き腕を交差させ撃った。

「あがらうかつ！」隊の長がそう言った時には、千鶴の撃った銃弾が彼の額を割っていた。立て続けに撃つ千鶴。ライフルをかまえる兵ら。飛び出す天谷と新居浜。少年が弾を込めた人消しを渡す。すかさず撃ってまた渡す。威力に兵がひるむ。押し寄せる一万の群

衆。鉈や手斧で兵に立ち向かう。兵は瞬く間に殺され、生き残った者は蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。

再び起こるときの声。群衆は渦巻くように千鶴を取り巻いている。陽光が彼女を照らす。何かにとりつかれたように、彼女は口を開いた。

「聞いて・・・・・・・・」

静まりかえる群衆。

「わたし達は勝った・・・・・・・・。わたし達は勝てる」

いまや皆、耳をそばだて、この小さな娘子の声を聞いている。

「みんな・・・・・・・・、みんなで萩へ行こう・・・・・・・・」知らず、彼女の頬を涙が伝う。

「みんなの手で、萩を取り戻そう・・・・・・・・」

瞬間、沸き起こる歓声。一揆の聲が高らかに上がる。嵐のなかで産声をあげた萩奪還の一揆の咆哮。

その様子を、街道離れた場所から見ていた者がいる。英国通事アーネスト・サトウと写真家のベアトである。荒れ野の騒動の一報を聞き、写真を撮るため駆けつけたところだった。

「この国では、民衆の蜂起を一揆と呼ぶ」日本語に精通し、候文まです読みこなせるサトウがベアトに説明した。

街道脇の丘のうえ、朝日を浴び、強風に黒い鎖帷子をはためかせ、二人の侍を従えた少女。サトウは、四百年前 英仏百年戦争末期に登場し、オルレアンを解放せしめたフランス少女の姿をそこに見た気がした。

野分の後

台風一過、野分のためのさわやかな秋風を頬にうけながら、馬上の千鶴は手綱引く亮太に言った。

「気持ちいい……。勝つてこの風を感じたい」

亮太はふりかえり笑顔で言った。

「勝つさ」

すでに一揆の軍勢は三万を超え、さらに続々集まっている。

新居浜と天谷がじゃんけんをしている。東夷と合流する約束の期日が迫り、どちらかが竜ヶ崎へ向わねばならず、勝った方がここへ残るとした。

「悪いな」新居浜が言い、天谷が無念そうに睨みつける。別れ際新居浜が天谷に聞いた。

「勝てると思うか？」

「残ったのが、俺ならな」「けつ、何を言う」気色ばむ新居浜に、天谷はこう続けた。

「民衆が、民衆の手で、萩を開放する。これほど胸躍る愉快なことはないじゃろう。このじゃんけん一生根に持つゆえそう思え」

「おっさん、攘夷の騒動という騒動にみな顔を出しとるくせに、まだ出し足らんか」

街道は萩本陣の裏山を横に臨みまっすぐ続く。萩は目前である。

約束の岬、竜ヶ崎ではすでに外松が朗報を持ち帰り、オテント丸は騒然となり、あとは天谷と新居浜を拾うだけであった。が、姿を現したのは天谷一人である。

「新居浜はどうした？」理由を問われて、

「奴はじゃんけんに勝った故、萩に残った」と、天谷は事の顛末を説明した。その話に、東夷を始め皆が驚き、驚嘆の声をあげた。

「すぐに艦を萩へ向け、加勢に行こう」話しの最後に天谷は言った

が、東夷は意味ありげな笑みを浮かべた。

「その必要はない、千鶴らは勝つだろう」と言った。東夷ばかりではない。桜井も外松も、陸まで、意味ありげな笑みを浮かべている。「おんしら気色悪いぞ」天谷は抗議したが、既に東夷たちは奇兵隊はじめ連合諸藩の作戦の詳細を聞き及んでいる。故に余裕の笑みだった。

東夷が立ち上がった。

「よし、新居浜はいないが、赤い筏全員合流した。出航じゃ、全速をもって関門へむかう」

ついに高らかに宣言された。水戸藩武力討幕の挙兵である。華々しく軍艦五隻が出航し長州へ向かった。この度、水戸藩が購入した軍艦は十二隻、内五隻を出陣させた。日本中が騒然となり、当然のこと幕府はおおいに揺れた。しかし、動揺しながらも、会津を中心に水戸征討軍を組織し、遠征の準備を始めた。

しかし、既に水戸軍艦五隻は瀬戸内を抜け、豊後沖に至った。

野分の後（後書き）

次話、最終です。

反逆者たちの狼煙

豊後沖で合流した水戸藩軍艦五隻と土佐藩軍艦四隻は、小倉藩田野浦に接岸、水・土連合軍三千の軍勢が上陸した。そのまま小倉城へ向け門司を進攻。一報を受け駆けつけた小笠原藩士と海沿いの大里・赤坂・手向山付近で交戦となった。連合軍は敵を充分ひきつけて迎えうち、一進一退を繰り返し、敵をその場に釘付けにした。赤坂海岸に東夷のオテント丸そして海援隊の三隻の軍艦が現れ、艦砲射撃を持って援護した。

丁度その頃、四百の小船に便乗した奇兵隊が、関門海峡を越え、紫川を遡り、音もなく小倉城付近に上陸した。その数、四千。

全員が上陸したところで、総督山県狂介が無言で軍配を振り下ろした。刹那、誰一人声をあげることなく駆け出し小倉城城門へと向った。一気に打ち破られる大手門、続く槻門かえりもんそして脇の鉄門くろがねもん。後には惨殺された守衛の遺体が転がり、兵はその上を飛び越え駆け抜け、続々と侵入する。やがて気付いた留守居組みと激しい戦闘となった。しかし、精鋭の奇兵隊に対し物の数ではなかった。

策謀に気付いた小笠原藩士達が、きびすを返し小倉城に取って返した時には時既に遅し。炎々と燃え盛る小倉城を前に為す術がなかった。紫川の支流二ヶ所に水門があり、敵に攻め込まれた時その水門を閉ざせば辺り一面泥土となる仕掛けがあった。その仕掛けを逆に使われた。城に火を放ち逃れてきた藩主忠忱を中心に、企救、田川と京都郡まで退いた。

九州探題として小倉城に小笠原忠真が入城し、もって幕藩体制の完成として二百年、今、その炎上が政権崩壊の、そして反逆者達の狼煙となった。

翌早朝、焼け跡の小倉城に東夷らはやって来た。意気上がり大いに氣勢を上げる奇兵の中、山県狂介が彼らに気づき近寄ってきた。「馬鹿なことばかりやってないで隊に来い。幹部として迎えてやる」

と言った。東夷は、

「山県兄には逆らえん。だが俺は、トンネルは嫌いだ。海がいい」と答えた。

「お前には敵わんの」笑いながら言い残し、山県は去って行った。懐かしい顔にも会った。陸奥宗光、池内蔵太、高松太郎始めとする、海援隊諸士である。

「おう、どうしちよる？ 相変わらず無茶ばかりか？」

「諸兄こそ、海運業は儲かりようか？」

「おまんも、皮肉がうもくなった」から始まり話に花が咲く。

そこへ情報収集に遁走してきた陸が戻ってきた。

「会津が水戸に侵攻、水戸藩主の指揮のもと国境にて打ち破られた様子。小栗忠順は要塞彦島に逃げ込んだまま。大軍は下関に布陣しております。加えて、萩ですが……」

東夷が身を乗り出す。それが聞きたかった。

「薩大軍と一揆の軍勢が合流し、大勝利とのこと」

東夷はスクツと背をのびし、北東の空を見上げる。

「して、志功を討ったは？」

「狗の子……、とのこと」

よし、小さく呟くように頷くとしばし沈黙の後こう言った。

「残るは下関の小栗のみ。出航だ。要塞彦島に殴りこむ」

「はいっ」と勢い良く答える陸。

「小倉を落とし、下関を奪えば討幕は成ったも同然。我らも一緒に行く」海援隊諸士が言う。もはや朝意など関係ない。歴史は彼らの意志で決まるのだ。

刀のつかを握りしめる東夷を筆頭にした赤い筏の面々。桜井が言った。

「死んでさえいなければ必ず縫い合わせてやる。大暴れして来い」

悲しみの果てに

秋の川の水は素手に冷たい。香枝はその流れの中に片手をつけて、その冷たさを楽しんだ。萩まであとわずかの道中である。浅瀬で遊ぶ良太に目をやり笑みを浮かべた。平和の訪れ。街道は行き交う人々で賑わっている。皆、故郷へ帰る人か。山々の紅葉が美しい。

その彼女の後ろに立つ人影。足を怪我しているのか、杖についている。

香枝は黙ったままだ。背後の人影もまた、黙して語らない。その手にはあの写真がある。

心臓の音が高鳴る。けれど心は沈黙したままだった。何も考えられない……。

「香枝どの」男が口を開いた。声が心なし震えている。

遠い記憶の向こうの忘れることのできない人の声……。香枝はふりかえることができない。川辺にしゃがんだまま。答えることもまた。

「俺はあの日、ひとつしか約束をしていなかった。きっと、また会えると。その約束は今果たせた……」

涙が頬を伝い川面に零れた。ずっと、思い描いていた。再び会えたら、こう言おう、ああ言おう……。気丈に振舞って、昔と変わらぬ自分を見せたいと。だが、何一つ声にならなかった。口を開けば、しゃくりあげる子供のようだった。

「いまひとつ、約束したい。終生、離れぬと……」男の声を聞きながら、子供のようになしゃくりあげるだけだった。

平

成17年7月 校了

反逆者たちの狼煙（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

ご意見、ご感想お聞かせいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1890a/>

SF奇兵隊2 伝法赤い筏

2010年10月8日14時48分発行